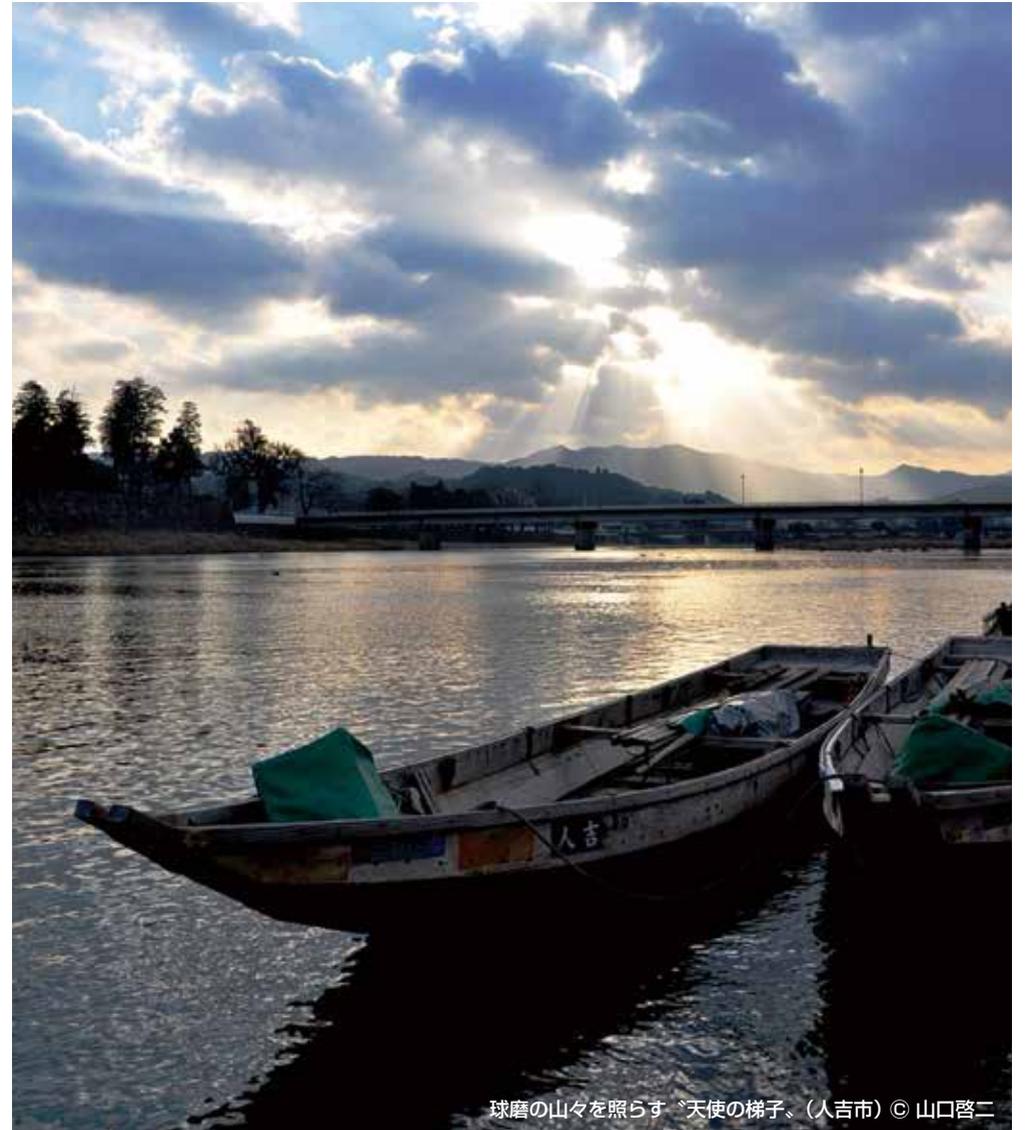


流域の人々と歩む月刊誌

# くまがわ春秋

2019  
**1**  
第34号

## 肥後細川藩御用絵師「矢野派」



球磨の山々を照らす「天使の梯子」、(人吉市) © 山口啓二

月に願いを。

# 織月

せんげつ

Japanese Traditional Rice Shochu  
SENGETSU



織月城（人吉城跡）にて撮影

織月酒造株式会社 SENGETSU SHUZO CO.,LTD. 〒868-0052 熊本県人吉市新町一番地 TEL0966-22-3207  
飲酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁止されています。  
妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発達に悪影響を与えるおそれがあります。 <http://www.sengetsu.co.jp/>

月刊 くまがわ春秋 第34号 2019年1月15日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社  
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 <http://www.hitooyoshi.co.jp/> [info@hitooyoshi.co.jp](mailto:info@hitooyoshi.co.jp)

定価 540円 本体 500円

雑誌 81779-01-9



4910817790192  
00500

# 最近のおもな出来事

- 12月16日(日)
  - ▽第66回球磨一周市町村対抗「熊日駅伝」大会(水上村岩野小学区スタート・ゴール)
- 12月23日(日) 天皇誕生日
- 12月28日(金)
  - ▽官庁仕事納め
- 1月1日(火) 元旦
- 1月3日(木)
  - ▽人吉市成人式(人吉市カルチャーパレス)
- 1月4日(金)
  - ▽町村成人式
  - ▽官庁御用始め
- 1月7日(月) 七草
- 1月10日(木)
  - ▽人吉市九日町「初えびす」(夫婦えびす神社)
- 1月13日(日)
  - ▽人吉市消防出初め式
  - ▽水上村「第55回桜の里一周駅伝大会」
  - ▽八代市成人式(八代市厚生会館)
- 1月14日(月) 成人の日
  - ▽球磨村「必勝合格祈願ノ旅:合格勝ち取りツアー」(R一勝地駅集合)

## 1月(第34号) 目次

- 巻頭言「猪よりのお礼とお願ひ」前田一洋…2
- 石橋を訪ねる 特別編「雄亀滝橋」…10
- 「漆の栽培をしませんか?」宮川 統…12
- 柳人があじわう漱石俳句③④ いわさき楊子…19
- 婚姻論②「よばい(1) 上村雄一…20
- くまがわの神さん仏さん②⑨ 宮原信晃…26
- 記憶の落ち穂③③ 坂本福治…29
- 「あがつ段」③① 上杉芳野…30
- 漢和字典は面白い①⑦ 鶴上寛治…32
- 建築みてある記②⑨ 森山 学…33
- 新・日曜釣り師心得①① 宮原 赤辛…38
- 「大門のおじちゃん」上村雄一…40
- 北御門二郎訳でトルストイを読む⑥ 喜多岡洋…42
- 「民俗主義文学論」(緒論)の復刻について…46

## 特別企画

- 細川藩御用絵師「矢野派」について① 上 大倉隆二…3
- 「民俗主義文学論」緒論—歴史と民族—① 上 小山勝清…47

## 今月の一言

### 『文読む月日』

(レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳) より

汝が<sup>なんじ</sup>この世に生まれたとき、汝は泣き、周囲の人々はみな喜んだ。汝がこの世を去るときは、すべての人々が泣き、汝一人ほほえむがいい。(インドの箴言)

### 【表紙写真】

#### 球磨の山々を照らす 天使の梯子<sup>はしご</sup>



この季節、晴れの日でも強い北風が吹き、雲が忙しく流れる事があります。球磨川あたりに夕陽が沈む時、レンブラント光線(天使の梯子)が現れ、この時期ならではの面白い風景が撮れました。撮影/山口啓一(人吉市)

- 「砂時計」思い出るままに③ 小野武司…52
- 外来語から学ぶ英単語③④ 藤原 宏…54
- 鶴鶴短歌会「昭和を詠む」…55
- 小説・相良清兵衛⑬ 山口啓二…56
- 倉敷便り②⑤ 「第二回津軽紀行②」原田正史…60
- おととわつとあすび②④ 松舟博満…63
- お休みどころ通信③ 興野康也…64
- 方言を味わう③⑩ 前田一洋…66
- 病氣と私① 瀬戸致行…68
- 「お正月には凧あげてコマをまわして」佐無田護…70
- 奥球磨、湯前町の偉人① 村木正則…73
- ひろしの「げっかん・ぎひょう」…76
- 前号「くまがわ学習塾②④の答え」…77
- 字図で見る球磨の地名②④ 上村重次…78
- 県民手帳・市民手帳…80
- 藩主の隠居と大目付…81
- いもご短歌会…82
- くまがわ学習塾②⑤…83
- 「安倍首相の年末年始」久馬 俊…84
- 情報ピックアップ…86
- 華文俳句社① 永田満徳…87



本誌の  
取扱店舗

■清藤書店 ■ブックスミスミ ■明屋書店 (錦店・免田店・多良木駅店)  
■道の駅さかもと ■TSUTAYA 八代松江店

## 猪よりのお礼とお願い

「曆の上では戌(犬)に追い掛けられる形で登場いたしましたる不肖亥(猪)にて候。かかる具合に十二支のトビカフセ(最後尾)の立場から、僭越ながら愚かなる人間諸賢にお礼を兼ね、一言ご相談申し上げ度き所存にて新年号の巻頭を拝借いたしましたる次第」など、まっぴりめからかなり時代がかった「猪武者」殿のお言葉であるために、ホンわかした屠蘇気分で聞くのには、どうも分かりづらい点が多々あるようです。それで、まこりや(余計な)事ながら筆者がそれを通常用語でお伝えさせて頂くことに致しました。

「先ずはお礼の言葉から。それは農作物をはじめ、あらゆる山の幸をたらふく食わせてもらっていること。これは仲良しのシカやサルどもも、一様に感謝しているところです。充実しかかった稲穂をシヤからせて頂く時には、それこそ至福のため身震いがするほど」。さらには庭先のサエノ畑のイモやら野菜類、それこそ食い放題、荒らし放題ですからね」

「猿は種こそあんまり荒らしませんが、栗から椎茸や柿など、時には家の中で侵入させてもらっている様子。鹿の喜ぶ声も、ちよくちよく聞いております。殊に植林して間もないスギやヒノキの皮の味、正に絶品だ」と

「まあ田ん中や山の周囲に電線やネットを張ってはあるものの、山の生きものにすればそんなのは、取るに足りないバリアですよ。そりやそうでしょう、サルには猿知恵、イノシシには猪突、シカは神様のお使いとして神通力という武器が備わっているのですから。そして二度それらを突破してみたなら、次からは絶対に失敗しないという、まことにすぐれた学習能力が備わっているのですからね」

「心外にも、害獣 などと呼ばれているわれら野性動物ではありますが、ただ困ったことにつだけ大きな弱点があるのですよ。いわゆる天敵という、それは最重要マル秘事項ではありますが、まあ正月早々隠し事をするわけにもいきませんので正直に申し上げますね。その恐ろしい天敵こそインですよ」

「かつて大抵の山村では犬が追い放しの状態で飼われておりました。そのためにコウくて村に近付くことは全くできませんでした。しかも犬には狩狩りという集団行動をする習性がありまして、犬たちばかりで未明から狩りに出掛けるのです。そのために成獣ばかりか、子猪の大半が食い殺されていたのです」

「かかる次第にて山村でも、犬を繋ぐという素晴らしい素晴らしき条例が、絶対に改められませぬよう、宜しくお願い申し上げます」。

(前田一洋)

## 巻頭言

# 細川藩御用絵師「矢野派」について①

元 熊本県立美術館 副館長 大倉隆二

「矢野派」と聞いてもピンと来ない人が多いのではなからうか。本稿ではその矢野派について概説したい。

筆者と美術史との関りは細川藩御用絵師に始まり、その中心が矢野派の絵師と作品研究であった。四十数年も前のことで、当然地方の御用絵師矢野派の絵師や作品は美術全集などに掲載されているはずもなく、手探り状態から始まった。さいわい島田美術館設立前の美術品台帳作りなどを手伝いながら矢野派の作品に触れ、生駒鮮



杉谷雪樵筆 花鳥図  
(県立美術館蔵)

魚店社長の故生駒廣氏収集の作品を数多く調査させていただいて、矢野派についての大まかなイメージを作りあげることができた(その後生駒コレクションの主要な作品は県立美術館に収蔵された)。以後も少しずつ調査・研究を続け、平成八年(一九九六)十月、県立美術館で開催した「開館二十周年記念・第十九回熊本の美術展『細川藩御用絵師・矢野派』雪舟流画風の再興と継承」がひとまずの到達点であった。これによって矢野派についてのその基礎作りができたと自負もしているし、あとは次世代の研究者によって加筆・修正され、より豊かな矢野派像が完成されることを願っているところである。

さて、「御用絵師」といえば徳川幕府をはじめ諸藩のお抱え絵師となった「狩野派」を思い浮かべられる方が

多いと思われるが、細川藩御用絵師の中心は矢野派であった。狩野派も大和絵に對して、中国の山水図など中国絵画の影響を強く受けているので漢画と呼ばれる。大和絵は日本の伝統的な画風で、王朝絵巻にみられるような日本の人物や風俗、歴史および自然を描いた。これに對し漢画は中国風の画風で主に中国の自然や歴史的人物などを描いた。狩野派・矢野派ともに中国風の水墨を基調として力強い「筆法」を重視するという点では共通するが、江戸時代の狩野派は大和絵と融合した画風も見せる。一方、矢野派は室町時代に活躍した画聖・雪舟の筆法をより重視し「雪舟流」を標榜する。つまり、矢野派は全国的な狩野派全盛の中で雪舟流の画風を守り続けた数少ない流派ということもできよう。

### 画系と主要絵師

矢野派絵師の画系については略系図を参照されたいが、このほかに門人は多数存在する。

系図筆頭にみえる田代等甫は、山口で雲谷等顔（二五四七〜二六二八）に学んだと伝えられ、細川幽齋

肖像（永青文庫蔵）の筆者と伝えられる。矢野家初代三郎兵衛吉重は等甫に学んだといひ、矢野家が雪舟流の雲谷派を肥後熊本に伝えることになった。雲谷派といひのは、山口にあつた雪舟の旧居「雲谷庵」を毛利家から賜り、雪舟の画風復興を命ぜられた雲谷等顔を祖とする流派で、矢野派もこの流れをくんでいる。また、長谷川等伯（二五三九〜一六一〇）も「雪舟五代」を標榜するほど雪舟に私淑し、狩野派と對抗した。桃山時代にはこのように雪舟崇拜の気運もあつたが、江戸時代になると狩野派が主流となり、雪舟流は山口と熊本に絞られてきた（山口の雲谷派についてはここでは触れない）。

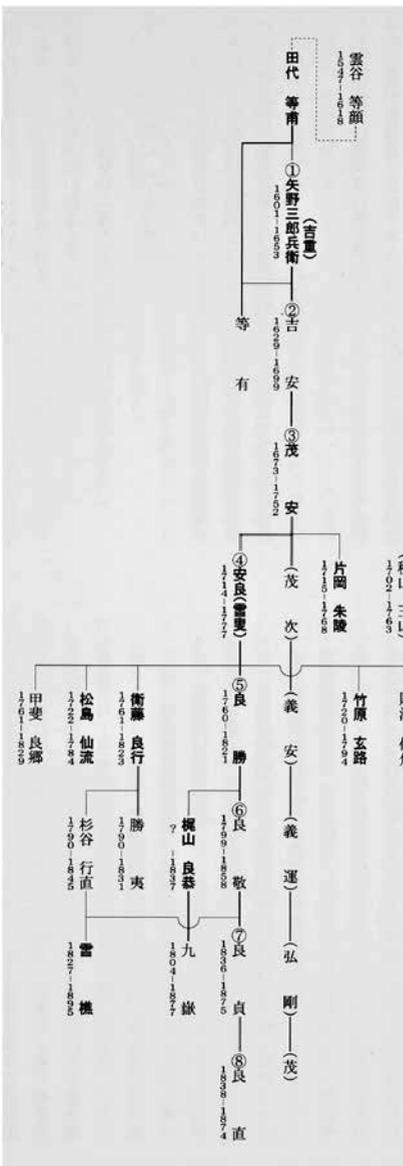
さて、矢野派絵師の中で注目されるのは田代等甫、矢野家初代吉重、三代茂安、四代雪叟、五代良勝、雪叟の弟子衛藤良行、良行の養子勝夷、梶山良恭、杉谷雪樵らである。ここではこれら主要絵師とその作品をとおして、矢野派の特長を概観してみたい。

田代等甫（生没年不詳）はもと長州人。雲谷等顔の門人で細川家が小倉にいた頃細川三齋に仕え、細川家

の肥後入国の際に三齋が八代に移つてからも三齋に仕えたらしく、寛永年間に八代で亡くなつたと伝える（『肥後藩雪舟流画家傳』）。細川家の正史『綿考輯録』には、慶長十七年（一六二二）八月、細川幽齋の三回忌にあたり幽齋夫人光寿院から『細川幽齋像』制作が命じられた事が記されている（永青文庫他に現存）。また、細川家文書中には江戸屋敷障壁画制作のことがみられるが、残念なことに『細川幽齋像』以外は現存しない。

初代矢野三郎兵衛吉重（二五九八？〜一六五三）もと長州人。画伝や伝記類、細川家文書などによれば、十二（三）歳のとき小倉で細川三齋、のちに細川忠利に仕え、寛永九年（一六三二）正月小倉城本丸座敷絵を制作、熊本では寛永十二年（一六三五）十一月熊本城本丸天守の修理および花畑屋敷の作事、同十三年九月〜十四年正月江戸上屋敷の画事にあつた。また、寛永十三年、唐人絵書日二官の奉公を願い出、同十四年

（資料1） 矢野派略系図





矢野三郎兵衛吉重筆 破墨山水図（県立美術館蔵）

には知行百五十石（知行地菊池）を  
 拝領、同年細川家菩提寺泰勝寺の絵  
 島原の乱の戦況絵図制作、同十七年  
 （二六四〇）十月江戸下屋敷式台間  
 の絵、同二十年（二六四四）『細川忠  
 利像』、慶安四年（二六五二）『肥後  
 国大絵図』制作にあたった。承応二年  
 （二六五三）歿。

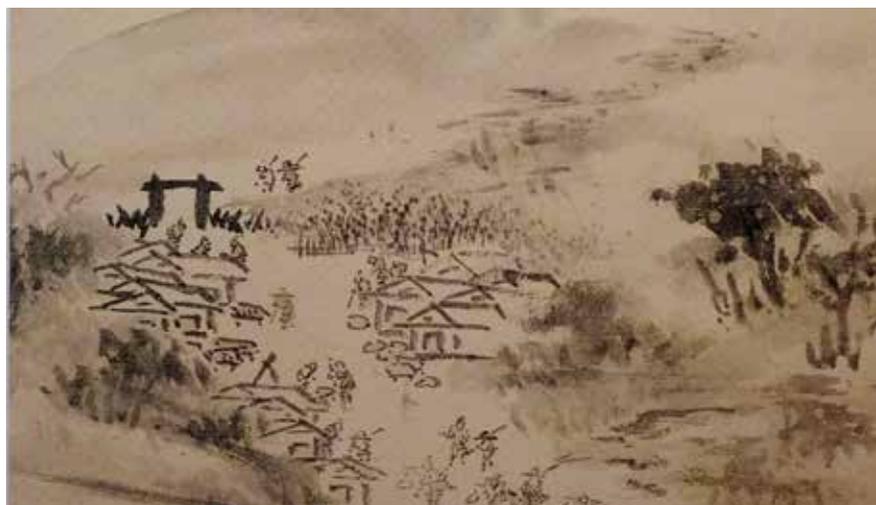
以上のように伝記や記録のうえでは  
 華々しい活躍が知られるが、現存作品  
 は少なく確実なものとなると『細川忠  
 利像』（永青文庫像）だけである。伝  
 承作品としては『月に梅図屏風』（も  
 と熊本城の障壁画と伝える。県立美  
 術館蔵）、『竹に虎・松に虎図屏風』（も  
 と細川家蔵の伝承あり。県立美術館  
 蔵）などが有力視される。これらの作  
 品には雲谷派を特徴付ける様式は顕  
 著ではなく、強いてあげれば『細川忠



伝矢野三郎兵衛吉重筆 竹に虎・松に虎図屏風（県立美術館蔵）

利像』の直線的な衣の表現あたりであろうか。

**三代矢野茂安**（二六七三～一七五二）は通称茂左衛門、号は  
 泛谷。二代吉安（吉尚？生没年未詳。小品の水墨画一点のみ存在）  
 の子。元禄十一年（二六九八）公儀絵図改に際し、肥後及び豊後  
 国内の細川領内の絵図制作。宝永三年（二七〇六）藩絵奉行とな  
 るなどの活躍も知られるが、正徳二年（二七二二）三月狩野派への  
 流儀替を仰せつけられ、翌年二月流儀替ならず矢野派は一代限り  
 と申し渡された。この流儀替一件は新しく御用絵師となった肥後狩  
 野家の『先祖付』に記されていることだが、真意はよくわからない。  
 第六代藩主宣紀（二六七六～一七三二）が幕府のお抱え絵師が狩  
 野派であることを忖度したのかもしれない。筆者は、矢野家二代吉  
 安の代に侍身分から職人身分へ固定されたこと対し、子のいなかっ  
 た茂安が自ら画職を放棄したのではないかとおもっている。矢野家  
 は吉右衛門茂次を養子に迎え、茂次は侍に復帰した。画職は山田  
 喜三右衛門（のちの雪叟）に引き継がれた。こうした事もあつてか  
 茂安の作品は晩年の小品が知られるのみであるが、曹洞宗寒巖派  
 寺院にいくつかの頂相が確認されている。宝暦二年（二七五二）八  
 月十日八十歳にて歿。



矢野茂安筆 瀟湘八景図（部分）（県立美術館蔵）



矢野良勝筆 琴棋書画図 (県立美術館蔵)



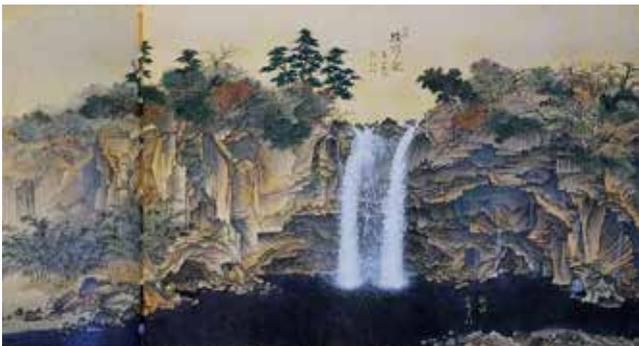
矢野良勝筆 波濤図屏風 (県立美術館蔵)



藩雪舟流画家傳)。また、『肥後先哲遺蹟』等によれば「矢

野家中興」とされ、多くの門弟を擁するなど、矢野家は良勝のときに全盛期を迎えた。画風は雪叟によって再興された雪舟風の筆法を主体としながらも多彩さを見せる。『琴棋書画図』(県立美術館蔵)では、雪舟より山口の雲谷派を思わせる一方、『波濤図屏風』(同)では長谷川等伯の同名作品を連想させる。代表作は同

門の衛藤良行らとともに細川領内の瀧や名勝を実写した『領内名勝図巻』(原題は「御領内山川之景」。永青文庫蔵)であろう。これは現地に赴いて実景を描いたもので、「写実的」に描かれているが、岩肌や樹木の描線は謹直な雪舟様式に則っている。そのほかに大和絵の画題によるものや僧侶の肖像画など多様な作品を遺しているが、どこかに雪舟流の画風が見え隠れする。落款にも「雪舟九世伝正統橘良勝」と書いたものもある(波濤図屏風他)ほどで雪舟流であることを誇りにしていた。文政四年(二八二二)八月廿三日歿。六十二歳。【おおくら・りゅうじ／玉名市】



矢野良勝筆 領内名勝図巻(阿蘇郡北里城村ノ瀧) 永青文庫蔵



矢野雪叟筆 山水図屏風 (県立美術館蔵)

四代矢野雪叟(一七二四〜一七七七)は、通称喜三右

衛門、安良と称し、号は龍谷、鶴仙斎、窓月、喫茶亭などがある。矢野家三代茂安に学び、のちその養子となり画職としての矢野家四代を継ぎ、藩画府根役となった。明和二年(二七六五)法橋に叙せられ雪叟と改名した。安永二年(二七七三)江戸龍口邸新落により召されて絵を描いた。安永六年(二七七七)八月朔日、六十四歳にて歿。

茂安の代に矢野家の画法は衰退したが、雪叟は中国の牧谿や雪舟など和漢の古画の模写等を通じて雪舟流の画法を再興した(『肥後藩雪舟流画家傳』)。牧谿の真作かどうかは不明だが『虎図』を模写した例(八代市立博物館蔵)や、細川家の伝雪舟筆『富士清見寺図』の模写(同

前)がいくつも残されている。こうして雪叟は矢野派の実質的な再興者となった。かたわら煎茶を好みその奥義を極めたという。画風は「謹厳にして高遠」と評され(同前)、『山水図屏風』(県立美術館蔵)や『旭に猛禽図』(同)など、まさにその評言がぴったりの感があり、雪舟の画風を彷彿させる。



矢野雪叟筆 旭に猛禽図 (県立美術館蔵)



五代矢野良勝(二七六〇〜一八二二)は通称右膳。号は龍谷、千嶂堂、枕流亭、漱玉菴、雪觀斎、桂光楼、水竹居など。藩画府根役。書画や古器玩物及び刀剣の鑑賞を好み、かたわら和歌をたしなみ、また八条宮法親王や北島雪山の書を学びその奥境に至ったという(『肥後

# 雄亀滝橋

## 美里町石野字桶岳



「雄亀滝橋」 急峻な谷間にあるため正面から橋の写真を撮れない

緑川水系の石橋である。肥後石工の代表者・岩永三五郎の代表作であること、通潤橋の架橋にさいし手本にされたことを重視し、球磨川流域の石橋ではないが、これを紹介する。

同橋は長さ15・5m、幅3・6m、橋高7・4m、径間11・8mの水路橋である。文化14年(1817年)8月着工、翌文政元年9月に完成。



井出(水路)

郡代・不破啓次郎、山支配役・篠原善兵衛位、惣庄屋・三隅丈八は石野村など10ヶ村の灌漑のため、緑川支流の柏川から水をひくことを計画し、井出の開削に着手した。しかしながら、途中に深い谷があるため、水路をのぼすことができなかった。そこで野津の石工・三五郎に水路橋の建設を依頼し、三五郎はその依頼を引き受け石橋を作り

上げた。このとき三五郎は24歳。この時点では、三五郎は苗字帯刀を許されていない。

山肌から当然に水が流れ出し、水路を通って、雄亀滝橋を通り抜け、再び水路をなっていく。漏水させず水を通す石橋をどのようにつ



昨年5月にも訪問したが、そのときには補修工事中であった

くつたのか、深い谷にどのようにして石橋をかけたのか。石はどこからもってきたのか。疑問はつきない。維新51年前に、この石橋がつくられた

ことに驚きを禁じえない。橋のある場所は「桶岳」といい、その滝を「桶滝」という。「雄亀滝」は両者の当て字である。(春秋)



あがたばし 県橋(美里町石野字県)。雄亀滝橋を通じて流れた水は同橋下流200mほど下流の県地区に流れ出していた。県橋は同地区にある。同地区では稲作がおこなわれて訪問したとき(昨年10月7日)、刈り取れた稲が掛け干しされていた。橋長5.5m。橋幅1.8m。径間3.6m。弘化2年(1845年)、作者不明(ただし、種山石工であることは確実である)。



岩永三五郎の墓(鏡町)。八代郡氷川町野津生まれ。寛政5年(1793年)~嘉永4年(1851年)。文政13年(1830年)苗字帯刀を許される。三五郎の業績の概要については別の機会に説明する。

# 漆の栽培をしませんか？

## ——人吉球磨産の漆で青井さんの塗り替えを

環境省希少野生動物植物種保存推進員 宮川 続

はじめに

「ウルシ」という植物を知っていますか。かつて江戸時代から明治期には人吉球磨の重要な産物として郡市内でたくさん栽培されていました。人吉の名にも「漆田」として残っています。



明治期には漆の産業を拡げるため漆伝習所が作られ、「人吉塗」としてその一

部が残っています。

私は、植物の勉強を続けるうち植栽したハゼノキは多く見かけるのに、植栽したウルシの木が残っていないことに疑問を感じました。そして、郡市内の古老に聞いて回りましたが「ウルシは無かばい」の声が返ってくるばかりでした。ウルシの木とハゼノキが似ている事は知っていましたがどう違うのか、そして人吉にたくさん栽培していたはずのウルシの木なぜは残っていないのかとの疑問を解くため、ウルシの木を探し始めて30年以上が経ちました。結局、現在まで栽培漆の木は人吉球磨で発見することとは出来ていません。

### 国宝青井さん

10年前、青井阿蘇神社が国宝に指定されました。中青井町で育った私が身近に感じている「青井さん」の建物は、漆で塗られているところがたくさんあります。当然のことながら人吉球磨産の漆が使われていると考えるのが妥当と考えます。この青井さんの漆ははずれ塗り替えの時から来るのは当然のことと思います。しかし、塗り替えるべき人吉球磨の漆の生産は昭和20年代頃で途絶えています。

### 文化庁の方針

文化庁は三年前、文化財の修復に使う漆は原則国産の漆を使う事という通達を出してきました。しかし、現在国内で使用されている漆の93%は中国から輸入した漆であり、国産の漆はわずか7%程度であることを知りました。これでは青井さんの修復に国産の漆を使うことはほとんど不可能に近いではありませんか。では、人吉球磨で生産するしかないのではないかと、漆探しの旅が始まったのです。

### ウルシ探し

このような経緯で漆探しを始めましたが、ネットで検索したところ「国立林業研究所」が漆の栽培を推奨する記事を発見しました。そしてそこが茨城県にあることを知りましたが、くわしい場所は分りませんでした。2016年暮れ、茨城在住の子供の所へ遊びに行つた際、通りかかった所に「国立林業研究所」の看板を見つけ、さっそく飛び込みで漆の栽培について尋ねました。そして、岩手県の浄安森林組合を紹介していただきました。2017年2月に電話を掛け経緯を話し、苗を分けて欲しいと御願いしたところ、「現在は、先の文化庁の方針で全国から苗の引合いが殺到しておりすぐ対応することとはムリだが、申し込みは受けます」との返事でした。しかし、一年半ほど待っても連絡はありませんでした。

しかし、めぐればかりはいられません。行政や地域の人動き出せばなんとかなるのではと考え、人吉市のワークショップでは松岡市長といっしょのチームとなったことを幸いに、漆栽培の計画を訴えました。また、人吉

市主催の議会報告会でも同様の提案をしました。しかし、その後の反応は鈍く、何の動きもないようです。

## 大子へ

何の進展もなくウルシ探しは行き詰まったかのようでした。進展し始めたきっかけはテレビ報道で茨城県の「大子漆保存会」の報道を見たことでした。

さっそく大子町へ電話を掛け大子町特産品流通公社を紹介していただきました。これまでのいきさつや私の思いを伝え、栽培の様子を見せていただけないかとお願いしました。浄安森林組合で、電話だけで話しても私の思いが十分に理解していただけなかった事もあり、出掛けに行く決意をしていました。応対していただいた大子町特産品流通公社の藤田事務局長は「報道や雑誌の取材は多くあるが個人からの申し入れは初めてだ」と困惑した様子でしたが、日程を調整していただき8月1日に会うことになりました。実際にウルシの木を見、栽培状況を見ておくことは、今後栽培することになったとき、何よりもプラスになると考えたからです。

## 漆の栽培

前日の7月31日に牛久まで行き、

翌8月1日、大子へ向け出発。茨城県内の移動とはいえ、高速と国道を使い2時間の道のりを走ることとなりました。久慈川に沿って遡り、ウルシの畠が散見され目的地が近く



茨城県大子町のウルシ林の様子

なつたことが分かります。約束のJR水郡線の上小川駅は山間の小さな駅です。藤田さんが着く前に時間があつたので附近を見て回ると桑によく似た植物が栽培してあります。見ると楮コウの木でした。近くに「巻枯らし」をかいたハゼによく似た木がありました。葉が広くウルシの

## ウルシ掻き(ウルシの樹液採集)について

・植栽から10年から20年ほどで樹液の採取が出来るようになる。木を育てることが一番大切。除草・枝払いをして木を作ることがたいへん。

・樹液の採取時期は6月頃から遅いと10月末頃まで。朝から10時くらいまでで、それ以後は樹液の出が悪くなるため作業しない。1本の木に20ヶ所ほど傷を付け樹液を掻く。その後4日ほど木を休ませ、木の回復を待つ、その上に傷を付け掻くため4日に1回ウルシを掻く事となる。これを繰り返し1シーズンに80本から150本くらい、多い人は1シーズン



ヘラを右手に持ち替え樹液を集める益子さん

を出した服装で、作業用の前掛けは漆で黒く汚れておりたいへんな作業であることがわかります。いざお会いしてみると、聞いたかったこと、知りたかったことがあふれてきます。でも、藤田さんの説明と益子さんのお話で多くのことが分かりました。以下に要約すると、



ウルシを掻く様子。樹液の出が悪いときツノのような部分で更に傷を付ける

に300本を採取する。

- ・1本の木から牛乳瓶1本ほど採取できる。
- ・皮をはぐ鎌(掻きガマ)、ヘラなどの道具は青森の鍛冶屋一軒だけで作っている。

・樹液の採取はその年限りで、採取後伐採してしまう(これを「殺し掻き」という)。

・その後、伐採した木の根を次の世代の苗として発芽更新する。

・殺し掻きの外に「養生掻き」と呼ばれる伐採しない方法もあるが大子では行なわれていない。

・ウルシを掻いて入れる入れ物は「チャンポ」と呼ばれ、ホオノキの樹皮で作る。ウルシを掻いて縁にヘラを打ち付けても割れない。また縁をヘラでたいて、ささくれさせる事で樹液をヘラから落としたりやすくする。竹だと割れてしまう。

### 漆栽培

・実生からだど20年ほどかかる。根からの更新だと10年ほどで樹液採取が可能。また、大子では優良株を

根から更新し増やすため、実生栽培はやっていない。植栽後、草刈りと枝打ちをする。大子では丘陵の平坦な畠で栽培し、樹間を広く取り機械除草がしやすいようにしている。

・樹液を採取する高さまで枝を付けない。

・通常施肥はしないが、大子では施肥で肥育している。

・幾つか病気があるが発生したら引き抜き、焼却し、他への感染を防ぐ。

・小さい頃は鹿の害も注意する。

一通り話を聞き、写真など撮影した後、益子さんからお茶を勧められました。よく冷えたスイカで汗をかけた後でもあり、とってもおいしかった。帰りがけ、藤田さんが「大子で一番大きなウルシの木に案内します」と、畠の脇へ連れて行ってくれました。樹齢50年ほどで直径が30cm〜40cm程、ウルシ掻きの跡があります。「昨年掻きました」と教えていただきました。ウルシ掻きの跡は樹液で黒くなっていて、皮膜が被った後がありません。ウルシの木は傷つけた後、樹皮が被さり傷を回復する力

が弱いため、「養生掻き」ではなく、「殺し掻き」と呼ばれる伐採更新方法が採られるようです。そして、その伐採更新こそが人吉球磨でいくら探してもウルシの木が見つからなかった原因のようです。

昼食後、公社の事務所に案内していただき、現在の活動などを聞かせていただきました。すぐ近くにあるウルシの資料館は休館日で見ることができませんでした。公社に大きな樹皮の束がありました。これは「コウゾ」で、

現在は栽培が希少で高級和紙「美濃和紙」の原料だそうです。ウルシもコウゾも「人吉球磨でもいっぱいあつたはず」ですが、すでにウルシはなくなり、コウゾもカジもうち捨てられたままです。何とか産業に結びつけられたらいいのにと感じながら大子を後にしました。

### その後

大子に行く前、知人を通じてウルシの苗が手配できそうだと聞き、即座に御願いしました。と同時に植物学者の「ブ



集められた樹液



昨年採取した後伐採された漆の木

# 柳人があじわう漱石俳句

— 34 —

いわさき楊子



「ラントハンター」荻須博士から「苗はムリかもしれないけど種ならなんとかなる」と連絡をもらいました。11月末、楽しみにしていた苗が「15cm位しかないけどいいですか」と打診され、山に植えるには小さすぎるので残念ながら断りました。やむなく大子の藤田さんに連絡したら、「そんなに小さいのはどうにもならない。うちのは大きくていいものだけど、注文が多くなるとかしたいが時間をくれ」といわれ、今年諦めるかなと思っていました。数日後「150本手配できました」と電話があり、諦めかけていたのでたいへんうれしく、大子の皆さんの好意に感謝感激でした。



ウルシの種

長期間探していたウルシに出合うことが出来、私の「青井さんのウルシ塗り替えを人吉球磨のウルシでする」もくろみはようやく始まりました。私が取り組んでいる昆虫や植物などの保全は一度途絶えてしまうと二度と帰ってくることはありません。しかし、漆の栽培や利用する技術は人吉球磨では一度途絶えてしまいました。幸い他の地域に僅かに残っていたことで、復活させる糸口は作ることが出来そうです。

大子からの苗は2月末か3月初めには届く予定です。今3人の方に植栽をお願いしています。私自身は「土地もなく金もなく」ですが、苗を育ててくれる方があれば増やし、人吉球磨に漆栽培・産業を取り戻せればと思っています。

日本では2千年以上前の縄文時代から漆を利用していましたし、中国では5千年前からのものもあると聞いています。人類が文化を形作り始めた頃から利用してきた技術を、私達の世代でなくしてしまうのは何とも残念なことです。

【みやがわ・つづき／人吉市】

## —— 本当の名前は？ ——

漱石という名はあまりにも有名なので、俳句も小説も五高の教師のときの名も夏目漱石でくくられることが多いようだが、実は違う。

**木瓜咲くや漱石拙を守るべく**  
(漱石30歳)

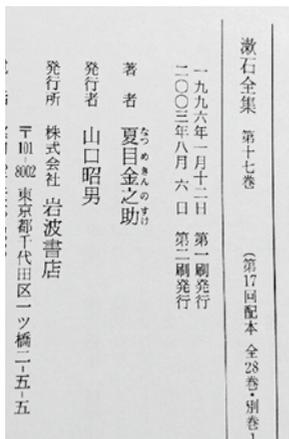
**月に行く漱石妻を忘れたり**  
(30歳)

漱石という名の初出は22歳のときだ。子規の『七艸集』の評を書いたときにはじめて漱石と署名した。漱石の意味は、流れに漱ぐを石に漱ぐと間違えたのをへそ曲がり訂正しなかったという中国の故事に由来する。「漱石」という言葉を俳句に使ったのはこの2句のみ。

**一東の韻に時雨るゝ愚庵かな**  
(漱石30歳)

**紅梅や舞の地を弾く金之助**  
(48歳)

夏目金之助が本名だったが、手紙や封書ではどう署名していたのだろう。漱石書簡集 三好行雄編(岩波書店)によると、書簡の最後に記された名は次のようにバラエティーに富んでいる。金之助、漱石、郎君、平凸凹、凸凹、金、愚陀仏、金やん、金生、夏金生、父。現在、ネット上で活動するときのハンドルネームのような、自嘲めいた署名がみられる。とくに、親しい子規とのやりとりでは、いまの若者と変わらないおちゃめな漱石先生だった。ちなみに『漱石全集』第十七巻(岩波書店)の奥付は写真のとおり「夏目金之助」の表記となっている。



子の都合一切きかず命名す  
アルファベット順に高齢者名簿  
【いわさき楊子／川柳と俳句の愛好家、熊本市】

# よばい (1)

上村雄一

「よばい」

「よばい」は、どこでもおこなわれていた。球磨川流域も例外でない。同じ地域内での「よばい」ばかりではなかった。もちろん、それもあつた。「おさななじみ」が「顔なじみ」になり「恋人」になって「よばい」という形をとって男と女が結ばれるときもあつたし、夏祭りなどを通じて「顔なじみ」になり「よばい」に発展するときもあつた。

現在と違い愛し合える場所は限られていた。そのとき、男と女は自立・自立した存在であつたかといえ、必ずしもそうではなかつた。むしろ、男も女もムラの一人としてムラの掟に拘束されていたし、保護もされていた。若者たちは、ムラの掟に加えて、若者組独自の掟にしばられていた（『西郷どん』の「郷中制度としてのニセ（二才）組織」を想起せよ）。そのことを前提にしたうえで男女の性愛のひとつの形が「よばい」



祭りは日常生活から遮断された特別の日である。誰しも着飾り、気分を高ぶらせる。日頃の疲れをとるために、はしゃぎ楽しむ。以前は遊びの機会が少なく、祭りは労働の厳しさのもとで閉じ込められていた「自由の渴望」を解放するときであつた。そういう場で、若い男女が出会い、恋に落ちるのは自然な成り行きである。昔はそれは「ヨバイ」の契機になった。現在では「ヨバイ」の風習は失われているけれども、男女をむすびつける場として祭りが機能していることは今も同じである。

であつた。地域を超えて「よばい」がおこなわれるときもあつた。ムラを超えた大きな「祭り」などが、その出会いのそのまじりかけになった。いまほどに、男と女が出会える場のない時代である。出会うとすれば「祭り」くらいしかなかつた。地区を超えた「よばい」は、女の

属する地域の男たちにとっては、よそ者の「侵略行為」として受け止められて、それに対する「自衛行為」として攻撃の対象にし、喧嘩におよんだ。山を越え、谷を渡つて、遠くのムラまで向かう「よばい」もあつた。いまの感覚からすれば、目的の場所に行くだけで時間を使い果たしてしまいうなところまで男たちは行つた。向か

うだけでなく、そこから戻らなければならぬ。そのあとには辛い仕事が残っている。山仕事、農作業など、そのすべてが長時間の重労働であつた。それでも男たちは「よばい」をくりかえした。こうした遠方への「よばい」は、男の地域と女の地域の間になんらかのつながりある場合が多かつた。

このように「よばい」にはさまざま



八代市坂本町のある集落の山である。70年前まで、この山には道があつた。その山道を、毎日、人々は歩いた。ひえ、あわ、大豆などの交換が山道を利用しておこなわれた。山の頂上には一本杉があつて、そこは若い男と女の逢瀬の場所であつた。逢瀬は、「よばい」につながっていき、婚姻にいたるときが少なくなつた。そのため、山を境に、それぞれの地域には親戚関係の家が多数生まれ、それらの家々では、いまも、身内として意識されている。そこにおいては、男と女の「合意」がすべての前提になっている。もちろん、親が決めて相手と結婚するときも多かつたが、それは現在でもおこなわれている婚姻形態で、「よばい」とは区別されるべき問題である。

な型（パターン）があつた。夜中にひそかに女のもとを訪れ、その女に性的行為を求めるといった単純なことではない。さまざまな例を紹介するこ

とは「よばい」の実態を確認するうえで不可欠の作業であるけれども、そのためには現在の地域名をあげざるを得ないが、現時点で、それをおこなうことには、どうしても無理がある。

そこで、ひとまず、小山勝清『在る村の近世史』とエンブリー夫妻『須恵村』・『須恵村の女たち』の例を紹介するにとどめる。両者は周知の文献で、その内容を引用しても当該地域に迷惑をかけないであろう。「よばい」の風習を記録するのは重要な課題だが、ことはそれほど簡単ではない。両文献の例を基礎にしつつ、それを補完する程度で、流域の「よばい」の具体例を小論では紹介するにとどめる。それでも現実の「よばい」を少しは理解していただけるであろう。

## 《若衆組の「よばい」》

「よばい」を考えると、若衆組（薩摩の「郷中」）の存在を無視できない。たとえば司馬遼太郎は、若者は適齢になると若衆組に入り、若衆頭（薩摩では郷中頭）の支配に属し、若衆組のなかで、おとなになるための教育のすべてを受けるとし、漁村なら海難救助の訓練を受けたり、山村なら山火事の消し方をならつたり、ときには夜這いの方法をならつたり、あるいは「よばい」

に「連れていってもらった」。さらに若衆が娘のもとへ「よばい」にこなかつたときの娘の親の気持ち（「そのことを苦にしていた」）、娘が妊娠し

たときの対応（複数の男と交際し、子の父が誰か不明の場合、娘は父親がだれであるかを「指名する権利」があつて、自分が好きな男や将

## 〈よばいについての国語辞典・語源辞典の説明〉

## ①『言海』

『言海』（1891年）（明治24年）

「男女互二呼び誘ひ情ヲ通ズ」とする。そのうえで古事記、万葉集、靈異記を引用し、「婚」と「私通」の二つの漢字を当て「夜這い」の字を使用していない。前者は「結婚」の「婚」で、いわゆる「妻問婚」を指している。後者は結婚を前提にしない性愛を指す。

## ②大辞林（第2版）（1995年）（平成7年）

「呼ばう」の連用形から男が求愛をし、女の許に通うこと。元来、男が女の所に通う結婚形式が一般であったが、のち嫁入婚が支配的になると次第に不道德なものと考えられるようになったとし、「婚」と「夜這い」の字を当てている。「婚」は「妻問婚」、後者は『言海』のいう「私通」を指す。婚姻形態の変化にともなう、前者から後者へ移行を倫理的側面（私通は不道德である）を含めて指摘している点に特徴がある。

## ③広辞苑7版（2018年）（平成30年）

「呼ばう」の連用形から、求婚すること、言い寄ることとし、この場合には、「婚」を当て、次に、夜、恋人のもとへ忍び込んでいくこと、女性の寢床へ忍び入ることと説明し、これには「夜這い」の字を当てている。

## ④新明解語源辞典（2011年）（平成23年）

夜、男が妻以外の女のもとへ情交を目的に忍んでいくことと説明し、何度も呼ぶことを原義だとして「よばい」に「夜這い」の字を当てている。婚姻形態が、男が求婚し、女の許に通う「通い婚」から、女が嫁ぐ「嫁入り婚」に変化するのに伴って、次第に、「よばい」は不道德なものになっていったとする。「夜這い」は、夜に這う（はう）ように忍んでいくという気持ちである、と同辞典は解説している。「行為」でなく「気持ち」としていることに留意したい

来を安定させてくれそうな男を恣意的に選べばよかった）などの例を紹介している。それは、「司馬史観」でなく、通説に近い内容であろう。

ただし司馬は、薩摩の「郷中」では、「よばい」の教育はおこなわれなかつたと説明している点には注意を要する。司馬遼太郎『明治国家のこと』（ちくま文庫）68頁以下参照。問題は、司馬遼太郎の説明が球磨川流域についても当てはまるかであるが、少なくとも坂本村には当てはまる（『坂本村史』1142頁以下）。

男の若衆組だけでなく、女のそれも存在し、「よばい」において重要な役割を果たしたが、ここでは、それに触れない。

## 《辞書的説明》

国語辞典・語源辞典の説明は右

頁のとおりである。違和感を覚える人もいれば、率直に納得する人もい

ことには慎重にならざるをえない。ところで「呼ばう」が「よばい」に音韻変化したこと、結婚制度の変化にともない「ヨバイ」の意味に変化が生じたことの2点については、それぞれの国語辞典はほぼ同一

風習として残っているわけ

でなく、その実態を知っている人はほとんどいない。

名前は残っているが、その内容を知らない、それが「よばい」である。それゆえ覗き見趣味もでてくるだろう

が、それは悪いことではない。知らないものを知りたいと思うのは人間の基本的

欲求にほかならない。しかしながら具体的に地区名をあげてその実態を紹介する

は、それぞれの国語辞典はほぼ同一



勝清の生家。『或る村の近代史』は事実を素材にしながらも、封建社会の近代化の過程で発生した摩擦現象の本質を明確にするた意図的に脚色している部分がある。現実の勝清の生家に「光枝」がいて、「光枝」に対する「よばい」があつたとはかぎらない。ただし、完全な創作であるかといえば、そうではない。

の説明であって、そのことは確認されてしかるべきである。それにしても「通い婚」時代と「嫁入り婚」時代への変化はあまりにも遠い昔に属し、どうしても抽象的理解にならざるをえない面が残る。加えて音韻的連続性もないとする見解もないわけではない。「よばい」の当て字のひとつである「婚」については、鶴上寛治「漢和字典は面白い⑩」本誌28号37頁参照。

付言すると、男が棒で石などをたたき「よばい」する風習もあった。これを「よばい棒」というが、これについては別の機会に触れる。

### 光枝の場合

小山勝清『ある村の近世史』で紹介されている例。女の名前は光

感覚を都会のもので、それとはちがう田舎の感性があることを認めている。否、相違の存在を強調するとともに、両者に価値の序列がないことを指摘することに勝清の真意がある。現在の通念からすれば、都会が性愛に寛容で、田舎は非寛容的であるようにみえるが、勝清はそうにはみていない。これも注意したいところで、結論的にいえば、「純潔論」「貞操論」は都市部の支配層・知識階層で生まれでて、それが周辺に広がっていったと彼はみている。勝清は、それを光枝の例で説明しようとしたのである。



現在の晴山地区。川辺川右岸にあって山に向かって細長い集落である。現在は静かな住宅地（田畑もある）で、晴山の若者たちがどこを活動の拠点にしていたのかは確認していない。

枝。勝清の奉公人・太一の17歳の娘である。光枝は奉公先の勝清の許で父・太一とともに暮らしている。ある夜、勝清は、何者かが家に忍び込もうとする物音に気づき半身を起こした。泥棒だと思い、寢床をでて、音のする方に近づいた。二、三人の男たちが光枝の床近くにうずくまっていた。「泥棒！」と勝清は怒鳴った。すると、その者たちは驚き、慌てて、急いで逃げた。翌日、勝清は光枝に、娘は亭主をもつまでは男に身を委ねてはならない、一旦男に身をまかせると処女の操が失われる、心も汚されるので立派な人の奥さんになれない、と話した。光枝は、心まで汚れるといわれて驚き、気を落とした。他方、村の若者たちは主人（勝清）に対し反発した。

### 《勝清と正春》

『或る村の近代史』は事実を素材にしながらも、封建社会の近代化の過程で発生した摩擦現象の本質

勝清は、若者たちの行為を「けがらわしい風習」と断じた。若者も悪いが光枝も悪く、そういう風習が存在している自体が悪いとする感覚である。「女の純潔」・「女の貞操」の過剰な強調といつてもいい。現在でも、こうした「純潔」意識は残っているだろうか。おそらく残っていないだろう。結婚前の性愛を反道徳的とみる考える人はいまや化石的存在であろう。人間の長い歴史をながめるとき、「純潔」の強調は短期間の時代の産物で、性愛の自由を許容する時期が圧倒的に長い。もちろん身分制度のもとでは、上位身分の者と下位身分の者では性感覚にちがいがあった。婚姻も同一身分の間でおこなわれるのが常であった。勝清もそのことを自覚し、自己の

を明確にする目的で勝清は事実を意図的に脚色する方法を利用している。勝清の生家に「太一」や「光枝」がいて、「光枝」に対する「よばい」があったと本文中で書いたが、それは完全な事実ではない。「勝清」も同書では勝清でなく、「正春」という名前の、同書の主人公にとどまる。しかし同書は完全な創作であるかといえば、そうではなく、光枝の例は確実に存在した。それ故、勝清はそれを記録したのである。「正春」としたのは、勝清の意図を表現できないので、ミスリーディング（誤解を与えかねないこと）を承知で、小稿は「正春」を「勝清」とした。

くまがわの神さん仏さん 29

# 今も残るイノシシ千匹塚

宮原信晃

平成最後の年は「亥」の年。  
十二支でも最後の亥（イ、イノシシ）  
の年である。イノシシにまつわる神

社を調べてみると、九州ではイノ  
シシが和氣清麻呂を助けたとき  
れる古事から北九州市小倉区に



球磨郡錦町一武にある「太郎山ん神」の祠  
に田山勝志さんと行く

2社、霧島に1社とイノシシを祀る  
神社があった。人吉球磨にもイノシ  
シと関わるものがないか「イノシシ  
市たぬき町」にお住まいの前田一洋  
先生に会いに田野町へ出向いた。  
「あるある面白かどがあつばい」  
と、先生が書齋の奥から昭和52  
53年頃の資料をひっぱり出して見せ  
て頂いた。

特に目を引いたのが錦町の一武は  
志戸内谷にある「太郎山ん神」と  
いう祠の記録である。

さっそく翌日、錦町の田山勝志さ  
んと共に一武の奥に車で向かった。

「ここを左に降りると渋谷敦先生  
宅ですがこのまま真っ直ぐです」と  
田山さんが助手席で道案内をして  
下さった。  
山の奥へ向かう細い道を進むと左

あると明記されていた。  
錦町4、あさぎり2、人吉1の  
合計7ヶ所である。  
前田先生は昭和52〜53年頃に九  
州中を、「イノシシん塚はなかるか  
な」と52ヶ所を発見して訪ね、貴  
重なこの資料を作られた。

「この地蔵さんには我が子の代わ  
りに蛭顔童女という名を付けた、  
架空の自分の子供のお墓たい」と続  
けた。

「へえくすごい話ですねえ」と田  
山さん。「資料に書いてあつたたい  
とネタばらし。  
資料には「千匹の猪を獲った太郎  
八（猟師名）がそ  
の殺生戒の罪を悔  
い生命を散らした  
猪どものために蛭  
顔童女なる架空の  
自分の小娘の墓を  
建て供養したこと  
は容易に想像され  
るのである」と詳  
しく書かれていて、  
人吉球磨に7ヶ所

に小さな祠があつた。  
ひよいと覗いてみると、何と地蔵  
さんがお座りなさっているのだ。  
「イノシシ、山ん神、そして何で  
お地藏さんなんですかね？」と田山  
さんの素直な質問があつた。  
前田先生の資料を丸覚えしていた  
ので、一息ついて話し始める。  
「イノシシを千匹も仕留めたら、ま  
るで我が子を絞め殺したと同じ深い  
深い罪のあつたたい」と自慢げな私。



祠の中の地藏さん

「この地蔵さんには我が子の代わ  
りに蛭顔童女という名を付けた、  
架空の自分の子供のお墓たい」と続  
けた。  
「へえくすごい話ですねえ」と田  
山さん。「資料に書いてあつたたい  
とネタばらし。  
資料には「千匹の猪を獲った太郎  
八（猟師名）がそ  
の殺生戒の罪を悔  
い生命を散らした  
猪どものために蛭  
顔童女なる架空の  
自分の小娘の墓を  
建て供養したこと  
は容易に想像され  
るのである」と詳  
しく書かれていて、  
人吉球磨に7ヶ所



前田一洋著「猪 鹿類獣魂供養塔」より

# 記憶の落し穂

その ③③

絵と文／坂本福治



## 不思議なタイミング

小学三年の時に平壤で終戦を迎えた。二十代の終わりごろ、平壤時代の話ができる相手が欲しくなり、新聞に名前を出した。全国からの反応は三十人位と予想していたら、何と半年で二二〇〇人になってしまった。当時私は、東京の湯島聖堂でアルバイトの身分だった。たちまち同窓会を作ることになった。会員の二二〇〇人は、親戚や身内のように、惜しみなく協力された。神奈川大学教授の平原直さんは、度々私の所に来られ、会報の作り方や校正の仕方などをこまごまと指導して下さいました。何号かの会報二二〇〇部が玄関に届いた直後、先輩の細田氏が他の用事で来られ、さっそく自分の原稿の頁を開いて目を通し、意外なことを言われた。「これは訂正してもらわないと困る」。クラスメイトの現在を紹介した文の中で「〇〇君は美人の奥方をもたらってうらやましい」の文中、「美」の字が抜けていたのだ。即刻、印刷所から美の活字をもらい、二二〇〇分に押し込んだ。この時、細田氏が来なかったら、発送して大問題になっていたはずだ。

【おかもと・ふくじ／画家、人吉市】



調査した52ヶ所の位置（同書より）



昭和53年当時の熊日新聞記事より

この資料は人吉、錦町、あさぎり町の教育委員会に手渡していますので、どうぞ見せてもらってくださいませ。

尚、人吉球磨にはもともっとイノシシ塚がありそうです。あなたの家のもあるある。

参考資料…「猪―鹿類獣魂供養塔」前田一洋先生

【みやはら・のぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】



## 上杉芳野の「あがつ段」③1

# 今年も笑いでスタート



スタジオでの記念撮影(2018年9月25日、テレビ熊本にて)

主人から「今日は大切な日やつで踊んなぞ、歌うなぞ」と言われた。「踊らん、歌わん」と返事すると「今日は人の前でパカパカ喰うなぞ」とも言われ、「喰

わーん」と返事。

結婚式の華やかな雰囲気の中でキャンドルサービスが始まった。薄暗くなってきたときに主人が私の方を覗き込んで「今、喰え、早く喰え」と小声で言った。

私は最初から目掛けていた、とても美味しそうな桃の生菓子をパツと口に入れた。「うー！ 何だ、これ！ 塩だ！」私が口の中に放り込んだのは、桃の形をしたお塩だったのだ。周り

の誰が見ているか解らないのでここで吐き出す訳にもいかずニコニコしながら一気に飲み込んだ。慌ててウーロン茶を何杯も飲んだ飲んだ。こんなこともあった。友達と選挙の投票に行く時に友人の車に乗せてもらった。投票も無事終わり、今来た車の場所や車の特徴も覚えてなくて、慌てて「お待たせ〜ごめんねエー」と車の助手席に乗り込んだ。すると、運転席に若い知らない男の人がいて「どなたですかー？」と私の顔を覗き込んで

「もう片方の足を出して」と先生が言うので痛くない方の足を出したら、その足を見比べながら「これは腫れてはない様ですね。シツプは帰ってからしなさい」と言われた。私の足の太さを腫れだと勘違いされた様だった。今までにこんな大きな足を見た事がなかったのだろう。あの先生も今度の件で、肉離れした人の足を診る時は両方の足を見比べるに違いないと思った。こんなこともあった。私達が仲人をしたのが13組で、仲人夫人というのは本当に辛い立場であった。



昨年テレビ出演した時の記念品

お医者さんが「何で早く来んじやったね」と怒ったように「早くシツプして」と看護師さんに言われた。するとその看護師さんが「先生、この方はいつもそうなんですよ」と答えて言った。

「あつすみません、間違いました」と慌てて直ぐに車から降りた。すると友人の橋本浩美ちゃんが隣の車の中で一部始終を見ながらキャツキャツ笑っていた。失敗もこうして書く材料になっていくから楽しいものだ。今年もどんな失敗があるのか、家族もドキドキ、私もワクワクでスタートだ。

主人の父が昨年他界したので、今年は年賀状を書けない寂しいお正月だ。毎年の暮れには主人の父も餅丸めを手伝ってくれていたのに。人の良さというのはいなくなつて解るものだとつくづく思う。亡くなった父も私達がはじめにするより明るい方が喜ぶだ

ろうと思つて今年は笑いでスタートする事にした。あれは何年前だったろう。私がまだ社協に勤めていた頃、「電話ですよ」と呼ばれ大広間から事務所まで走った。途中で足が歩けなくなる程に痛くなつて外科病院へ行った。

「もう片方の足を出して」と先生が言うので痛くない方の足を出したら、その足を見比べながら「これは腫れてはない様ですね。シツプは帰ってからしなさい」と言われた。私の足の太さを腫れだと勘違いされた様だった。今までにこんな大きな足を見た事がなかったのだろう。あの先生も今度の件で、肉離れした人の足を診る時は両方の足を見比べるに違いないと思った。

# 漢和字典は面白い

17

鶴上寛治

## 狡

字義として漢和字典には、《①ずるい②すばやい③うたがう④そねむ⑤乱れる⑥そこなう⑦顔は美しいが誠実さ

のないこと》と、人間の持つている性質・行動がずらりならんでいる。古代の中国人、自覚していたのだな。だから【多部】にしてしまつて——わかつていて、あまりにも恥ずかしいからそうしたとしか思えない。字典に〈犬のような交わり〉とまで書く。何たる言い草、あの忠実無比な犬に対してあまりにも失礼な。ちなみに「狡」という字をみてみると《①みめよ②まじわる③悪がしこい》とあった。「倭子」という名を親からもらつておられる方がおられた。「何とお読みするのですか?」とまでは聞けても「どういう意味ですか」とは聞けなかった。知らなければ平気でお尋ねできたのだが。

## 駄

無駄・下駄・足駄・雪駄・駄作・駄目——この字が付く熟語にはどうも情けないものが多い。「駄」は馬十太で、「太」は「担」に通じ、馬になつて「担」が本来の意(駄賃・荷駄)。人間を載せて運ぶ——そこから下駄・足駄・雪駄。乗用馬に対して荷物運びの駄馬は下等だと無駄・駄目が生まれたのかもしれない。囲碁や演劇・スポーツのダメ・ダメ出し・ダメ押し——これらは前向きなことばだと考えたい。英語のダメージ(damage)とは偶然の一致。

## 破

石を投げつけ、それが当たれば、当たつたところの皮(皮膚)は破れる。反対に、手で石を殴れば、殴つた手の皮が破れる。その関係を見事に示している漢字でご立派! そんなことは漢和字典には書かれてはいない。〈くだける波のように石がくだける〉と書いてある。楽曲で次第に調子が細かく変化が多くなつていくものを「破」という(序破急)。石破さん、は何もかも石で破る人なのだろうか? 次第に調子が激しく変化していく人なのだろうか? 【つるかみ・かんじ／人吉市】

### 建築みである記 29

## 八代広域消防本部庁舎をあるく

森山 学

フランス、パリの郊外ポワッシーという町に、「サヴォア邸」(一九三二年建設)という名の著名な住宅がある。広い芝生の広がりの真ん中に、柱列に持ち上げられた白い箱が浮かぶ、美しいたたずまいの住宅である。

柱列がつくる建物の下の空間、つまりピロティには自動車滑りこんで来る。箱に横一列に開けられた水平連続窓は、部屋の隅々にまで日光をもたらすことで結核を治療する採光装置である。緩やかなスロープで屋上へとそぞろ歩けば、優雅な

曲線を囲む壁に包まれて、日光浴をしながら風景を楽しむことができ

これは近代建築家ル・コルビュジエ(一八八七〜一九六五)が設計した建築史上の金字塔である。彼は、建築のテーマは宮殿や装飾ではなく、「住む」ということだと訴え、「建築」に革命をもたらした、まさに建築界の巨人であった。

このサヴォア邸へのリスペクト作品が八代にある。現在の世界の建築界をリードする建築家、伊東豊雄氏(現在、くまもとアートポリスコミッシヨナー)が設計を手がけた八代広域消防本部庁舎(一九九五年建設、写真①)である。

これは八代広域行政事務組合の消防本部と八代消防署の複合施設



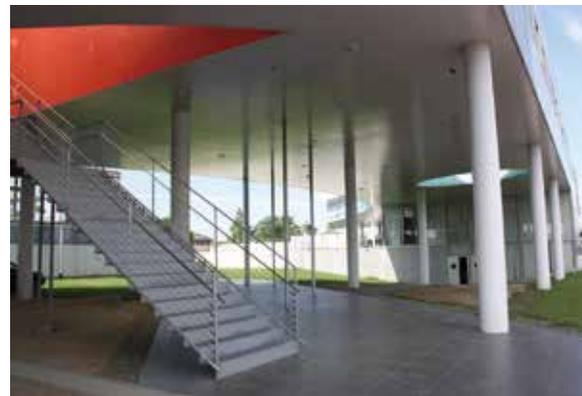
写真① 写真左手に臨港線。水平連続窓と高い柱列のピロティ

であり、伊東氏が八代市立博物館  
未来の森ミュージアムに続き手がけ  
た、八代で第二の建築作品である。  
建設されたその年に、「第一回くま  
もとアートポリス推進賞」を受賞  
している。



写真② ピロティに駐車された消防車両

立地は八代インターチェンジと八  
代外港を結ぶ「臨港線」という幹  
線道路沿いにあり、緊急時の出動  
にも有利である。八代インターチェ  
ンジからは車で約二〇分の位置にあ  
る。



写真③ 横道から見たピロティ

そこに建つのは、高い柱列に支え  
られた広い箱。アルミパネルの外壁  
には水平連続窓が横一列に並ぶ。ま  
さに規模が拡大され、再解釈され  
たサヴォア邸である。

水平な帯のような窓は、臨港線



写真④ ピロティ

をまつしぐらに走る自動車のスピー  
ドがかたちになったものだ。窓から  
は、行き交う自動車を超。パノラマで  
眺めることができるだろう。

それにしても柱列はあまりにも高  
く、本家のプロポーションを随分と

崩してしまった感がある。しかしこ  
れには理由があつて、大きな消防車  
両をピロティに駐車するために導き  
出された高さなのである(写真②)。  
近代建築の金字塔と消防署との幸  
福な結婚とも言えようか。

そしてこの高さのおかげで、ピロ  
ティからは、建物で囲まれた中庭ま  
でを容易に見通すことができる(写  
真③④⑤)。実は、このオープンな  
風景こそ伊東豊雄氏が、この建物で  
目指したかったものである。



写真⑤ ピロティから訓練フィールドを見る



写真⑥ 主訓練塔

中庭は単なる庭ではなく、訓練フィールドである。芝生のフィールドには主訓練塔（写真⑥）、副訓練塔、補助塔が並び建ち、その足元には見学用の階段席がある。この階段席を上げば、その上が訓練用プー



写真⑦ 訓練フィールドを囲むカーブする壁

ルになっている。

伊東氏は、八代市立博物館未来の森ミュージアムを設計するにあたり、展示室の室内環境を維持するために閉鎖的になりがちな博物館という公共施設を、いかにオープンに



写真⑧ エントランスホールへ続く階段

するかを考えた。その結果が、丘の上に建つガラスの箱というデザインであった。今回はその考えをさらに押し進めようとした。ここで開かれるのは消防士の訓練である。プロテクト越しに訓練の風景を眺めることができし、また訓練フィールド自体は「公園」として開放され、市民はいつでも閉鎖的であったはずの公共施設に入りこみ、見学することができ。ここではきつと、親近感と信頼感、そして憧れが生まれる。

訓練フィールドへと足を進め、フィールドの内側から建物を眺めれば、四角いはずの建物のかたちが大きなカーブを描いていることがわかる。つまり四角から楕円を切り抜いたようになってい。フィールドはこのカーブに抱き込まれている（写

真⑦）。

それでは外階段を上って二階のエントランスホールへ行ってみよう。



写真⑨ 内部廊下

外階段は建物をくり抜いた楕円形の穴のなかに伸びていく（写真⑧）。穴の壁のうち二面だけが赤く塗られ、アクセントになっている。

この赤色は光を反射して、階段の周りの空気を赤く染める。

階段を上りきると、その右手が八代広域行政事務組合のオフィスで、左手が八代消防署である。フィールド沿いの楕円形状に沿って、二つのエリアを結ぶ廊下がある（写真⑨）。この楕円形の壁の窓は水平連続窓ではなく、床から天井までいっばいの窓となっている。廊下に沿って歩くと、遮るものなく、思いっきり訓練フィールドの全体を眺めることができる。

八代広域行政事務組合側

には、楕円形の水色の穴が垂直方向に開けられている（写真③右半分）。八代消防署側には長方形の緑色の穴が垂直方向に開けられている（写真①左半分）。各々のオフィスに光を取り入れるためであるが、エントランスホールの階段と同様、四角いモノトーンの建物にアクセントをなす。

ちなみに庁舎は見学者を受け入れており、本校、熊本高専の建築社会デザイン工学科の授業でも、時折見学をさせて頂いている。みなさんもぜひ一度、訓練風景の見学がてら、訪れてみませんか。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

## 新・日曜釣り師心得 ①①

# 港、港に女あり

宮原 赤竿

大きな声では言えないことだが、釣りに行く場所に私には彼女がいる。例えばもう10年以上前には鹿児島



新年早々、港の女を目当てに集まったライバル達。釣りより大事なこと!?

県は枕崎港に「味のピカニ」という店が深夜に開いていて、瀬渡し船に乗る前にはこの店で芋焼酎と名物ラーメンをすすめるのだ。

その店主は私より20歳は歳上で、彼女と呼ぶより「母ちゃん」と呼んで釣りの楽しみもだが、母ちゃんの店でワイワイやっている時の風景が脳裏



普通に釣れば、これだけ釣れるのに、港の女には弱いボク

から離れることはない。

一昨年、久しぶりに枕崎へ足を伸ばしてお店に顔を出す、いつの間にかあれから20歳は歳上のお姿になっておられた。しかし、「赤竿さん、髪の毛が無くなってきたねえ」と言う母ちゃんに反撃は出来なかった。

「いつものラーメンと焼酎」というセリフは歌碑を建てて残してきた程に昔と変わらない会話であった。

私達の釣りクラブ飛翔会のメンバーは、真冬は寒ク口釣りに甞島へ行く。船に乗る前は「どこかに良かおなこの



「俺の子だ!」とライバル達と競い合って手を上げる。俺の子ばい!

で華やかになってきた。

「最後はうどん下さい」と宴会のメの料理に舌鼓を打って、今夜の釣りの前夜祭は終わった。

タクシーにみんなで乗り込んで港へ着く。エンジンをそれぞれの車に掛けて、さあ、寝らんばん。

3時間ほど仮眠して、さあ、釣りの準備だ。竿・道具を釣りの瀬渡し船へ運んで船室で寝る。たくさん釣る人の中で耳栓、マスクをしてゴロリとなる。船の大きな振動が背中を押上げる。

「大時化」だ、「やばいぞ」。

グリーンと登って、ドン!と落ちる。気持ち悪くなってきた。どどどどどねえちゃん、助けて〜。

【みやはら・せつかん／熊本飛翔会会長、人吉市】



港の女にうつつをぬかし、魚が釣れずに干物が土産となった

おらんどかしらん」が口癖で、数軒の居酒屋に顔を出して、「彼女の選出」をするのである。

見つけました。鹿児島県いちき串木野市にある「和彩館どんどん」という居酒屋である。女店長が調理場で美味しい料理を魔術師のように手早く作る。30名は入る店内の料理は彼女の独り舞台。

料理を運ぶ店員は若い男だったり19歳のギャルだったりするが、私たちの本命は「どどどどどねえちゃん」そ

の人なのだ。しかも、巨乳なのである。

お店に着いて、いそいそとこっちやんがどどどどねえちゃんにザポンを2個もプレゼント。さすがにギャルにモテる技をもっている。

お店は大入り満員で、一通りお客さん達の料理を出し終わってから、どどどどねえちゃんは自分の巨乳の上にザポンを乗せて「はいポーズ」と登場なのだ。

それからである。ザポンを1個自分のおなかに入れて「ほら〜〜〜」と妊娠中の臨月スタイルで又しても登場したのだった。

「俺の子ばい!」とつい、いっちゃんに先んじて叫んだ私。「うんにゃ、おれん子やが〜!」と宮崎飛翔会の吉田さんの大きな声が続いた。

芋焼酎の周りに色んな料理が並ん

# 大門のおじちゃん

上村雄一

坂本駅で、お弁当を食べている、おじちゃんに会った。

列車の待ち時間を利用して食事しているわけではないと思っただ。肥薩線の普通列車の運行回数はひどく少なく、おじちゃんは待ち時間を利用しているはずがない。人吉行きの普通列車は午前7時13分のおとは13時03分発のディーゼルカーで、八代行きも似たようなものである。利用しにくいことこのうえないが、僕には何もできない。不便なので乗客は少なく、乗客が少ないので運行便数がいつそう少なくなるという悪循環が成立し、その循環の渦の中で、僕はもがくばかりだ。

それにしても、なぜ、坂本駅でお弁当か。子どもころから、おじちゃんのことには知っているので、不躰だけでも、疑問をそのままに伝えた。おじちゃんは、「汽車を待つている」と想定外の返事をした。「だいぶ待たんば、

そういうことで、おじちゃんは、旧友のいる旧八代市内に行き、そこで夕食を食べ、そのあと帰宅する生活をつづけている。大門から本田商店まで歩き、そこでお弁当を買い、坂本駅でそれを食べ、旧八代市内に行き夕食をいただく、そのくりかえし。以前は、旧友たちと焼酎を楽しんでいたが、身体を壊したあと、焼酎はやめた。焼酎を飲む旧友をみて羨ましいと思えるときもあったが、いまは、そういうことはない。



おじちゃんは、いつも、坂本駅構内のこの机でお弁当を食べている

おじちゃんは左官であった。器用で技量があると評判であった。弟子をとることにはなかった。親方衆から仕事の依頼があるときに仕事場に行き独りで仕事をした。気楽といえば気楽な生活であった。いまは国民年金と相続した

汽車は来んですばい」と僕は苦笑いしながら伝えた。おじちゃんは「知つとる」とニヤリとなさった。「そんなら自宅でお昼を食べばよかつじゃなかですか」と言った。おじちゃんは、「独りしていると、死にたくなるほど、さびしくなる。だけん、外にでて、弁当を食べている」と説明した。

おじちゃんは一度も結婚したことがない。その機会がまったくなかったかは知らない。しかし結果として、独り身である。兄弟姉妹は多かつたが、戦争で、3人の兄さんたちを失った。姉さんたちは嫁いだあと、しだいしだいに疎遠になっていった。独り身の生活になってから30年以上は経つ。

10年ほど前までは、ゲートボールを楽しみにしていた。いつからゲートボールをしなくなったのかは知らない。近所にヒトが居ないわけではない。けれど、近所づきあいには苦手なよう、少なくとも孤独を意識しないですむほどには親密ではないようだ。朝起きたら、直ぐにケーブルテレビをつけるが直ぐに飽きるらしい。テレビは一方的に流れ、おじちゃんと会話するわけではない。

財産を取り崩しながら生活している。自宅は築100年を超える古屋だが、あとを継ぐ者がいないので改修するつもりはない。「カネを残しても意味がなか」とくりかえし言う。しかし、ときには「甥と姪に少しは財産は残さんばならん」ともらされる。荒瀬ダムの撤去工事終了近くになっておじちゃんの自宅付近の護岸工事が急速にすすんだ。おじちゃんは、「ダムができたけん、水につかるようになった。ダムがなくなったら工事は要らん」と言う。

そういえば、おじちゃんは鮎釣りが本当に上手だった。数えきれないほどの鮎を毎年釣っていた。おじちゃんは今もう鮎を釣らないのであろうか。たぶん、釣らないだろう。年末年始になると寂しくなる人がいる。おじちゃんはどうだったろう。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

※大門地域については、本誌29号8頁以下を参照

## 贋造クーポン (上)

喜多岡 洋

はじめに

冒頭から恐縮であるが、帝政ロシアの経済事情を知らなため、この作品でいう「クーポン」の内容を理解・実感できていない。文脈から推測すると、紙幣ほどの信用力はないが支払い手段としての機能を果たす小切手類のようであるが、自信があるわけではない。ちなみに北御門も「クーポン」の翻訳に迷ったようで、当初は「利札」の訳をあてていたが、結局、翻訳せず「クーポン」にしている。

物語は、ギムナジウム（中学校）の学生がそれを偽造し、それ（贋造クーポン）を支払い手段として悪用したことから始まる。クーポンの偽造は犯罪で、偽造したクーポンを使用することも犯罪だが、2人の少年には「犯罪」の意識は希薄であった。しかし、それがもたらした結果は大きかった。些細な少年の犯罪からはじまる一種の因果の連鎖

百姓には会ったこともないと供述した。用心のため、庭番を買収し、主人の話に嘘はないと警察で供述させた。百姓は写真用材店の主人を相手に裁判を起こしたが、主人と庭番は前言を翻さず、百姓は裁判で負けてしまう。証言は司祭の前で十字架と聖書に誓っておこなわれる。十字架と聖書の威力は強く、証人は嘘の供述をしないと信じられていた時代である。二人の人間が神に誓って供述している以上、百姓が裁判で勝つ見込みは最初からなかった。写真用材店の主人は、良心の呵責にさいなまれたのであろうか、それとも神罰が下ることを恐れたのか、百姓に対して裁判費用を取り立てる権利と百姓を誣告罪で訴える権利を放棄した。

裁判官は「もし誣告罪が成立すれば、お前は3ヶ月の禁

錮に処せられ

る筈であった」

と述べて、商

人に感謝する

べきだと百姓

を訓戒した。



「贋造クーポン」

『トルストイ短編集』（人吉中央出版社、2016所収）1899年作、1904年北御門二郎訳

を描きながら、トルストイは当時の民衆の状況・心理を本書で描いた。粗筋の略述は物語の読解を妨げるが、ストーリーテラーとしてのトルストイの側面に注目し、ここではあえて、粗筋にそってこの作品をみていきたい。

## 額縁屋と新売りの百姓

二人の学生は、写真の額縁を購入するとき贋造クーポンで支払い、額縁の金額と贋造クーポンの額面額の差額をつり銭として受け取った。それは詐欺行為で犯罪であるが、二人の目的は最初からそこにあった。写真用材店の奥さんは、二人がギムナジウムの学生であった事情もあって、クーポンが贋造物であるとは見抜けなかったが、帰宅した主人はそれを直ぐに見破り奥さんを厳しく叱責しただけでなく、新売りの百姓を騙し、贋造クーポンで薪を購入した。百姓は居酒屋に行き、クーポンを代金として利用しようとしたが、居酒屋のボーイと番頭はクーポンが贋造であると見破り、百姓を警察に引き渡した。

警察は百姓を尋問し、百姓は事実をありのままに話したが、写真用材店の主人は、薪の購入を否定しただけでなく、被害者であるにもかかわらず、百姓は「ありがとうごさいます」とお礼を述べるしかなかった。百姓にとっては、まさに踏んだり蹴つたりの結果で、百姓は酒に溺れてしまう。この裁判は庭番にも影響を与えた。十字架と聖書を踏みにつても神罰はくだらないこと、まじめに仕事をしなくても儲かることを彼は知った。庭番は、田舎の古ぼけた掟より、享楽を許す都会の生活がよいと考えるようになった。

## 学生の父親と神父

写真用材店の奥さんは、主人とはちがい、ギムナジウムの2人の学生は懲らしめられるべきだと考え、二人の姿をみつめようとした。そして、そのうちの一人をみつめ、学生の身元を調べ、ギムナジウムの神学教師にすべてを告げた。生徒の父親と神学教師は、この事件の前に、信仰の問題で議論したことがあって、父親は神学教師を完全に論破していたので、神学教師は事件を利用して父親に「復讐」しようとした。問題の父親は税務監督局長で、決して買収されることのない清廉潔白な人物、そのことを誇りにしてもいい。父親は、自由主義者でもあって、あらゆる宗教的現象

を迷信的遺物と憎む人物でもあった。神学教師とは、そもそも、反りが合うはずがなく、父親を傲慢不遜な無神論者であるとけなししていた。

神学教師は、父親に対する反感を抱いていたが、それを隠し、その授業で贗造クーポンの一件をもちだした。犯人の生徒の顔を見つめ、生徒が犯人であることを生徒たちに暗に知らせた。これは「教育」ではなく、むしろ「いじめ」だが、「二罰百戒」の美名のもとでも現在日本で実行されても不思議でない。いずれにせよ問題の生徒は我慢できなくなり、泣きながら教室を出た。母親はそれを知り、生徒にすべての事情を白状させ、直ぐに写真用材店に駆けつけ、奥さんにお金を払い、息子の名を伏せて欲しいと頼み、息子には、すべてを否認すること、どんなことがあっても父親には打ち明けないことを命じた。これも、現在日本で起りうる母親の行動であろう。それは母親が父親を信用・信頼していないことを示唆している。この作品を最後まで読めば、そのことは理解できる。

しかしながら、母親の「努力」にもかかわらず、父親はギムナジウムでの出来事を知り、学校に乗り込み神学教師

現実には多くの百姓はそうやって生きていたのだろう。しかし、トルストイは、百姓を「飲んだくれ」に墮落させた。酒に溺れ酔いつぶれながら、自分を苦しめた連中のこと、自分たち百姓を搾取して生きている「紳士淑女たち」のことを考えつづける人物として描いた。百姓は、馬泥棒について、「百姓にとつては馬は兄弟みたいなものだ。それを取り上げるのはひどい。どうせ盗むなら金持ちどものものを盗むといい。あの犬畜生どもにはそれぐらいしてやっつてちょうだい」と発言させている。

さらに、以前、下男として住み込んだことのある男のことを思い出せる工夫をしている。その男は、ポルトを壊した罰として給料から一ルーブル半を天引きするような人物で、そうした人物は当時多く存在したのであろう。その男は、労働者たちの失策や過誤を許さず、ときには労働者をみずから小突き、労働を強要した。世間的には、「自由主義者」として有名で、農奴制に反対し、一般民衆の生活向上を主張した。住居や食べ物が一番いいものをあてがい、給料もきちんと支払い、祭日にはウォート力を飲ませる人であった。

この男の農場に泥棒が侵入し、三頭の馬を盗んだ。その

を激しく攻撃した。神学教師が学生を犯人だと確信しているのに対して、父親は、母親の買収によつて写真店の奥さんは神学教師に話したことと正反対の内容を伝えたので、二人の対立は避けられず、喧嘩別れするしかなかった。父親は「僧権拡大論」の影響の証拠として事件を吹聴してまわった。他方、神父も、虚無主義や無神論が根付きはじめたと考え、ギムナジウムを去り修道院で修行し、ある都市の神学校の校長になるにいたる。このような状況で、二人の少年はどのような若者に成長していったのか。トルストイは、それについても触れているが、いまひとつ踏み込んで分析していない。彼の関心は、百姓と庭番にひとえに向けられている。百姓はもちろん、庭番も貧しい田舎の出身者であった。トルストイとしては、そうした者たちの物語として、この作品をつくりたかったのであろう。トルストイはそういう作家であった。

### 馬泥棒

薪売りの百姓をどうみるべきか。無知な人物とみていいか。事件は一種の「試練」で、再び、真面目に働けといえるか。

男はどのように反応したか。

「なんてことをしてくれた。俺が奴らに意地悪をしたとでもいうのか。…これまでのように甘やかしたりしないからな」と怒鳴り散らしたのであった。百姓たちが馬を盗んだと彼は信じた。友人たち（地域の有力者）も「いつも百姓たちの肩ばかり持っていたが、私の言ったとおりでしょう。あいつらは獣よりたちが悪いんです。鞭と棒なしじゃ連中を扱いきなせません」といった。

棒・鞭で百姓・労働者を使役すること（奴隷制・農奴制）と百姓・労働者の仕事上の不手際に罰金を加えることは、質的にちがう。しかし、罰金制度が好ましいというわけではない。男の自由主義は使用者と被用者の平等を前提にしていない強者の自由であった。薪売りの百姓には、男は自分たちを搾取する「紳士淑女」の一員に映ったのである。不幸な薪売りは、それゆえに、その自由主義者の馬を盗んだ。物（特に百姓の馬）を盗むことは許されない。薪売りの百姓もそれは知っていた。だが、その百姓からみれば、罰金をとりたてる自由主義者は、百姓たちから、金を盗む人にみえたらう。

【きたおか・ひろし／八代市】

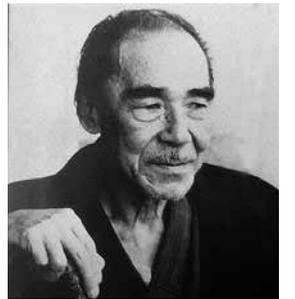
# 小山勝清「民俗主義文学論」(緒論) の復刻について

本書は、発行部数が約100部で、そのすべてに番号がふされている。そのこともあって、小山の基本思想を要約する論考として注目されつつも、目の目をみることなく長い間、幻の書であった。勝清の読者・研究者にとって、こうした状況は不適切であるだけでなく、勝清の作品を死蔵させることにほかならないことから、今回、これを復刻することにしました。

本書は、死の床にあった勝清がその長男・勝喜に口述筆記させて作成し、昭和40年10月3日、出版された。B4版の用紙5枚を袋綴じにしたものであって、1頁につき1行53字×22行の謄写版印刷である。

本書は短文であるが、そのすべてを1回で全文掲載するには無理があるので、これを2回に分けて掲載する。解説は前山光則氏。解説は3月号に掲載する予定である。

(編集部)



晩年の小山勝清  
([「相良村誌 資料編」]より)



勝清の生家 (23頁参照)

## 「民俗主義文学論」 緒論(上)

### — 歴史と民族 —

小山勝清

民俗学とは、民間伝承の信仰、風俗、習慣、伝説、民話、民謡、祭礼行事等を採集し、研究の資料として、庶民社会の過去における生活とその変遷を究明する学問である。

人間社会の過去の変遷を究明する这一点においては、歴史学同様であるが、歴史学の研究資料は文学をもって書き残された過去の記録であり、歴史学者はそれらの文献資料を発見収集して、真偽を考証し、内容を検討し、人類社会の興亡変遷の歴史を構成する。

考古学もまた同様な目的をもって、発掘された古代の遺物、遺跡を研究しこれを資料として古い時代の生活様式とその変遷推移を究明する。また人類学は、発掘された人骨などを資料として古代人の体質、形体を研究し、人類の起源と進化の過程を究明する。

このように、同じ人類の過去を究明する学問も、研究の対象たる資料如何によって名称がちがうのであるが、その成果もまた別々である。現在、われらは人類学によってなされた化石の研究により、人類の祖先がすでに十数万年地上に存在していたことを知り、考古学は石器の研究により数万年前から現代人の直接の祖先である人類が世界各地に生

存していたことをわれらに教えた。

日本においては、明治初年貝塚が発見されて以来、考古学が年をおって盛んになった。そして、遺跡古墳の発掘により、日本にも新石器時代があり、同時に縄文式土器使用した先住民族と弥生式土器を使った現日本人の祖先があつたことが証明された。

新石器時代から古墳時代に入つてようやく古事記、日本書紀、支那の魏書などの文献記録が現われ、いわゆる歴史時代に入った。記録はいままでもなく文字の発見によるものである。古事記、日本書紀も日本に文字が渡来してからの産物であるが、共に民族の過去の歩みを記録した史書であることは、歴史が民族社会の構成、発展、国家の形成にとつて、いかに重要であつたかがうかがわれる。

こうして、民族国家発展と共に、文学文化も大いにのび、時代を重ねると共に歴史の資料となる記録も豊富となり、現代に至つたのである。戦後、古代については、戦後歴史学者が記紀の神代篇を削除し、考古学を取り入れて、石器時代、古墳時代をつぎたしたが、兎に角、現代人は、長い日本民族のみならず人類の歴史を明らかに脳裡に描き、歴史の流れの中における現代人の地位を確立することができるのである。

かように、歴史は、別個の学問である考古学、人類学をも包含した形をもって、われらは過去を語るものであるが、現代は別として、日本においていえば、明治以前のことについては、社会全般完全に物語つていとはいえない。日本のみならず、欧米においても、歴史が権力階級のためのもの、あるいは権力階級を中心にしたもので、一般庶民のものでないことがすでに通説になつている。前に述べたとおり、歴史構成の資料たる記録文献が、文字の発明（日本においては渡来）の所産であり、その文字が庶民に普及せず、治産階級の専用物であつたのだから、記録が治者を中心とした記録になるのは当然で、時代をのぼればのぼるほど、この傾向は強くなつている。

また、治産階級の記録であつてみれば、その記録が重点を政治上、経済上、軍事上の大事件におくのも自然であり、私的のものより公的の記録になるのも当然である。従つてこれらの記録を材料とした歴史が民族興亡、社会機構の変遷を含む権力の推移を主題とし、思想、文化、宗教、風習等をもつて肉づけされているのも当然の結果である。

かように、歴史はいつの時代でも住民の大多数を占めている被治者階級——庶民自体の生活の実態についてはほとんどふれていない。庶民は常に納税の対象であつても権力の争奪の外にあり、歴史の影の存在であつた。

江戸時代になると、庶民に関する記録も多くなつたが、それはほとんど武士階級が書いた見聞録、卑史小説のたぐいであつて、しかも外見であり、庶民それ自体の記録ではない。庶民が何を考え何を感ず、何を信じいかに生活したか？目を皿にして歴史書をさがしても、これに答える記録は皆無に等しいのである。

これは、前述のとおり、歴史の本質、成り立ちによるもので、いたしかたないのであるが、さてしからば、歴史のこの空間を埋めるものがないであらうか。ある！われらは、歴史書によらずして、庶民の間につたわつていく伝説、説話、民俗、祭礼などによつて、歴史書にない農民の姿を身近かに知つていくのである。民族学とは実にこの伝承の民俗を学的に究明する学問なのである。

## 二

民俗学は、民間伝承、風俗習慣を研究する学問として英国に起つたが、日本では明治後年柳田国男氏が研究の緒を開き、独自の研究を重ねて、学問として体系づけに成功した。

しかし、柳田氏の民俗学が日本学界から独立の学問として認められるまでには、長い時日がかつた。歴史はその発生も古く人間の過去を知る学問としての首席にあり、アカデミー派では国権とむすびつき絶大な権威をもつていた。その歴史は前述のとおり記録文献によつて構成されたのだから、記録文献を尊重することは当然である。

しかるに、民族学は、文献によらず、考古学のように器物遺跡にもよらず、言葉や行為によって、古くから伝承されているものを蒐集研究するのだから、歴史学者はその資料の確実性を理由に長い問学問として認めなかったのである。これはあたかも裁判所において物的証拠を尊重し、物的証拠のない発言を信用しないのとよく似ている。

次に歴史においては、決定された時と所が非常に重大である。しかるに民間の伝承にはそれがない。たとえば民俗学の一資料である民話(おとぎ話)の多くは、「むかしあるところに」という言葉ではじまっているが、そのむかしがいつの頃か、あるところがいずれの地であるか判明しないのである。民俗学にとって重要なのは、採集した時日と処で、この点考古学に共通している。

かような理由で、柳田氏の研究は、その著書は文学作品として高く評価されつつも学問としてなかなか認められなかったが、民間には多くの協力者が現われ、民俗資料の蒐集は全国各地に及ぶようになった。

かくて、戦後は、民俗学という言葉がジャーナリズムにとり入れられるようになり、考古学の遺跡発掘と共に、民俗学的調査が若い学徒により集団的に行われるようになる。一方、柳田氏を中心とする民俗学者により学としての体系づけも完成したようである。また史学界も戦前とは変貌をとげたので、民俗学も学として学界から認められたようである。

しかし、民俗学の学としての本質をわきまえているのは少数の専門学者<sup>(マ)</sup>だけで、インテリとよばれる人たちの多くは、明白に把握していないように思われる。

### 三

民俗学も歴史学と周しく科学の一つである。民俗学はまず研究の対象たる資料の蒐集からはじまる。その種類は民間の信仰、祭礼の慣習、民謡、民話、舞踊、年間の行事、方言等、凡そ古くから民間に口から口と伝承されている

一切のものがふくまれている。舞踊、信仰、祭礼等には、それに付属する器物服飾等があるが、これも蒐集の対象となることがある。但し、それそのものの面白さでなく、あくまで伝承されたものとして価値を重視する。なお、採集の場合は、前述のとおり、時と場所を明記し、第三者の加工ふんしよくを避けることが求められる。

日本は民間伝承の宝庫といわれるだけあって、農村に足を踏み入れると、いろんな資料が滅亡寸前の形ながら現存しているのだから、これらの採集は比較的安易であり、興味深いことである。また、直接自分の心につながる事柄であるから、民俗学者でなくとも、ただ一地方の採集であつてもそれ自身意識があり、充分楽しめ、心を豊かにすることができる。

わけても民謡、郷土舞踊は、民俗学の民間への侵透とあわせ、観光資料として各地の民謡、民話、舞踊が発掘され再評価されるようになった。

しかし、これは民俗学的見地からの発掘再評価でなく、地方観光とマス・コミの合作といえよう。従つて、民謡、民話、舞踊、その地だけにある特有のものとして考えられ宣伝される場合が多いのである。しかも、それらのものがいつの時代、誰によつてつづられたかを追求しようとする。

むしろ、これらは民俗学法則に相反する。前に述べたように民俗学は、歴史学者から対象となる民俗資料がその発生の時と所を証明できぬことの故に、独立した学としての資格を認めなかったが、しかし、逆にこれは民俗学の学たる重要な本質である。

即ち、民俗学が資料を検討して求めるものは、年代でもなく、歴史的事件でもなく、個人に関することでもなく、庶民のものの考え方、事柄でも形でもなく感情と思想なのである。庶民は太古から文字を持たなかつたので記録を残すことができなかった。が、その代り、生活の思想感情を表現するところの信仰様式、祭礼、民話、民謡など、いわゆる今日民俗と称するものを伝承したのである。だから、その民俗を追求して古きを訪ねたら、庶民のそうした風習を生みだしたところのものの考え方とその変遷がわかるはずである。

※(マ)＝原文のまま

# 砂時計

## —思い出るままに— ③

### 小野武己

#### 2、叔父（母の次兄）のこと

##### ②福の神

佐世保市に引越してから。当時、子供たちは舗装のない道路上で、三角ベースの野球や缶蹴りや陣取り合戦や警察ごっこや、はてはメンコ、ビー玉などに興じていたのであった。野球といっても軟式テニスボールに竹バット、ランニング姿にワラ草履で素手であった。外野は道路下の稲刈り後の田んぼに守るのであった。自動車など殆ど走ってなくて、非常にまれにオート三輪の荷物車を通り、あとは自転車とリヤカーの時代であった。

小学4～5年だったと思うが、ある日、例によって、子供たちが集まって道路上野球に興じていると、遠方か

「あ、叔父さん、こんにちは」叔父さんの貫録に気圧されたのか、僕は一步下がって挨拶した。母はと見ると、その顔には普段には見られない安堵の表情が溢れ、嬉しさに満ちた生き生きしたお喋りの声が聞き取れたのだ。叔父さん、叔父さんに冷たい麦茶をあげてちょうだい」

僕は「ええよ」と、走ってお隣りさんの家の井戸に冷やしてあった薬缶を持って来て、台所の棚のコップを取り、それになみなみと注いで、「はい、叔父さん、麦茶ばいと差し出した。」

叔父さんはゴクンと二口飲み「おお、美味しかなあ」と残りを一気に飲み干すと「もう一杯呉れんかな」と言った。コップを受け取った僕は薬缶から再びコップに溢れんばかりに注ぐと叔父ちゃんに差し出した。

「お前が、次男のタケミかな、うむ、なかなか賢い顔をしているな、うむ、うむ」

「叔父さんはね、お母さんの二番目のお兄さんでね、東大を出て、今、九州電力の社長をこなさるのよ」

「ところで、お前よ、将来大学に行つて、どんな仕事を

ら、ボロロッツ、ボロロッツと、黒塗りの乗用車が、砂ぼこりを巻き上げながら、近づいてきた。子供たちが野球を中断して隅っこに避けると、車は2～3mの石垣の上にあるおんぼろ我が家の前に止まった。砂ぼこりが静まってから、前のドアが開き、若い男の人が降りてきて後ろのドアを開けると、よいこらしよ、とばかり小太りの小柄な男の人が降りてきて、すたすたと緩やかな坂道を上り、我が家に入っていくではないか。子供たちは「こいは何んや、UFOじゃなかにゃ」と泥まみれの手で、車を擦ったり、逆さまになって車の下を覗き込んだりしていたら、「こらっ、子供たち、汚い手で触るな、汚れるがね」と運転手さんが降りてきて、子供たちを追い払うのだった。あ、そうだ、家にはお母さんが一人じやったばい、僕は駆け足で家に戻った。ガラスと勢いよく玄関を開けると、例の小太りの叔父さんが、玄関の上がり框（がまち）の上になちよこんと座っていて、障子を開けてあり、仕立物にシュと手を動かしている母があり、二人で喋っていたが、縫い物に一区切りついたのか、やがて、母は叔父さんと正面に向き合い、にこやかにお喋りを始めたのだ。

やりたいのか、夢があるだろう、言ってみなさい」

「はい、僕も東京の大学に行きたいです。そして、偉くなりたいです」

「うわっはっはっはっ、東京の大学か、そうか、そして、叔父さんみたいに偉くなるか、うわっはっはっはっ」と豪快に笑ったのであった。

母と心許しあったように、ニコニコ歓談していたが、やがて、秘書に促されて、車へと戻って行った。黒塗りのUFOMみたいな車は、再び土ぼこりを巻き上げながら、小さくなっていった。車が先の角を曲がって見えなくなっただけ、僕は走って、母の処に戻る。

「お母さん、叔父さんな、行つてしまつたばい」

汚れたスツクを脱ぎ捨て家に上がり、母に報告する。

「ぞげんね、叔父さん、帰つてしまったのね」

再びお針仕事をしていた母の顔を覗き込むと、ちよっぴりウルウルしていたみたいだが、それ以上に、久し振りに兄に逢つてお喋り出来たからだろうか、充足感に満たされていたように思えた。ふと見ると、仕立物をする長い裁ち台の隅っこに今まで見たことも無いお札が何枚か置い

であったのである。

「お母さん、こいは、お金じゃろ」

「そうよ、叔父さんが置いていってくれた、お金のよ。」

叔父さんはね、家の、福の神なんよ」

「ふーん、そがんね、よか、俺おれが大きくなったら、俺  
いがお母さんの福の神になつてやつで」

何気ない会話であつたが、涙もろい母の眼は、前以上に  
ウルウルしていたみたいだつた。そして、僕は子供心に、  
叔父さんのようになって、お母さん孝行をしなくちゃと  
思つたのであつた。

実は僕が大学生の頃に母が明かしてくれた後日談だが、  
その九電社長の叔父から、男四人、女一人の五人も子供  
が居たのに、あの、次男のタケミを養子に呉れんか、との  
申し出があつたらしく、母はなんぼ偉いお兄さんの申し  
入れでも、私が腹を痛めて産んだ子供です、嫌です、と  
断つたそつだ。それを聞いて僕は母親孝行しなくちゃ、  
と前にも増して、思つたことであつた。

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

### 外来語から学ぶ英単語 (34) …… 藤原 宏

モード ・ モデル ・ モジュール ・ ムード ・ モダン  
mode model module mood modern

- ※ **mode** (モード) は、(物事を行う) 方法・様式や (物の存在や行動の) あり方・現われ方・形態・さらに (服装などの) 流行・ファッションなどの意で使われています。語源はラテン語「**mod-us** (モドウス)、寸法・分量・ます目・様式・方法」で、次はその派生語です。
- ※ **model** (モデル) は現在「手本・規範・標準 ・ 模型・見本・型 (デザイン) ・ やり方・様式・芸術作品の主題となるモデル・ファッションモデル」など多くの意味で使われます。
- ※ **module** (モジュール) は、工業製品などの規格化された組み立て「**unit** (ユニット)、基本単位」のことで、例えば宇宙船から切り離して操作できる小船「**a lunar** (ルーナー) **module** (月着陸船)」のように使います。
- ※ 「**mood** (ムード)、気分) は「**mind** (マインド)、心」の **mode** (在り方) が原義です。
- ※ 「**modern** (モダン)、現代の) も「たった今の方法」が原義で、元は量りで丁度目盛のところまで来た時に掛ける合図のことばでした。

(401)

## せきれい 鶴鴿短歌会

新年詠草 「昭和を詠む」

齡経りてわが身変われど 星空は昭和も今も同じまたき  
新幹線ひかりは西へ延びてゆきこたまは北へ北へと延びて

守永 和久

大戦の終りし昼は小川にて何も知らずに魚獲りして  
近頃は戦時の悲惨忘れしか昭和の時代終ると共に

河内 徹夫

竹鉄砲作る子ども等肥後の守左手の傷男児の勲章  
包丁とかご持ち畦の芹を摘む蓮華の花に蝶も舞ひ来て

中村美喜子

父還り母奪われて寂しさに祖母の懐母の替わりに  
激動の昭和の時代吾生まる少年時代は混乱の世に

西 武喜

神宮の森に響くは学生の鉛の靴音脳裏に残る  
天皇に捧げし命と亡き母の淋しい涙わたし七歳

釜田 操

終戦の間近なる日高原をねらいし如くB29が  
低空で銃撃してくる飛行機の操縦士の顔今も忘れず

三原 光代

駅頭に山征兵士の顔見つち戦地の便り母待ちわびて  
敗戦を泣き崩れ聴く祖父母らは国の行く末想い及ばず

橋詰 了一

裏木戸に微かな落書き戦闘機信じし吾がここに居たのだ  
行儀よく父母に兄弟並び居る戦時の写真の不思議な静寂

堀田 英雄

# 小説・相良清兵衛

13

山口啓二

「清兵衛殿、今年もいい時期になり申した。薬草を採りに参りましょござ」

蕨野村山口の薬師、長蔵が数人の供を連れ屋敷を訪ねた。冬至を過ぎると昼の時間は日毎に長くなっていく。これを機に、植物はそれまでに根の部分に蓄えていた栄養を少しずつ放ち活気溢れる季節となり、春へ向かって大きく成長を遂げる。

多くの生薬はその採取の時期で薬の効力が変わる。これを正確に見計らって薬草を採取すれば、その植物の持つ最大限の効能を得る事が出来るのである。特に根の部分を薬効にする植物は、冬至を過ぎた辺りから盛んに収穫して乾燥させ、いろいろな薬を処方していた。

ここ球磨の地は植物や昆虫の南限、北限となる生物が多く生殖している不思議な土地でもあった。数多くの薬草の宝庫でもある。カンゾウや紫苑、オウレン、大黃などが豊富に採れた。清兵衛は薬師長蔵らと共にその薬草を採りに冬山へ入ることが多かった。この年の暮れもまた同じであった。数々

「前回までのあらずじ」父休矣の後を継いだ清兵衛は、藩内の本格的な基盤整備を進めていき、屋敷の地下にはキリスト教の洗礼池作りや、『青井大明神』の遷宮にも取りかかった。

の薬草を用い、胃腸薬や解熱や止血、頭痛、滋養強壯など、多くの漢方薬が作られた。勿論調合の仕方もこの長蔵から習った。血流を良くし、お灸や染料、また油にもなる『紅花』は戸越の奥山に自生しており、そこは『紅取丘』の名が残り、また万江の奥では『芥子』の栽培も行っていた。

更に対馬の宗義智家との繋がりで、明や朝鮮から貴重な人参やジャコウ、靈芝、海馬、肉從容などを手に入れ、それで漢方医薬を作らせていた。特に強壯剤は朝から丸一日かけて焙煎し、材料を釜に入れる頃合いも火力も実に繊細で、間違えると効力がまったく無くなる事さえあった。そうして出来たのが媚薬『天金丸』であった。

翌慶長十六（一六一二）年夏、朝鮮で共に戦った加藤清正が病死したとの知らせが突然入った。前年には尾張名古屋城の普請に翻弄、その後次女との婚約が決まっていた家康公の十男で紀州徳川家の祖、頼宣公の警護役として徳川家に従属していたが、任を終え帰国途中の船上で発病、その後隈本に戻つてすぐに亡くなった。奇しくも誕生日と同じ六月二十四日、満四十九歳になったその日であった。清正公の葬儀には長毎公の代理として清兵衛が内蔵助以下数名の家臣と共に参列、そのおりに遺品として『檜』を戴いた。清正が遺言に残していた。この檜には金や銀、象嵌などきらびやかな装飾が施されていた。

清正が朝鮮で世話になったという証しであり、その装飾は清正が朝鮮で虎退治に使った物より遥かに優れていた。

初秋、いよいよ青井大明神の落成が近付いた。守り神である五色の龍があちこちに配され、本殿の破風には昇り龍と、柱には南の藤原家を示す『藤の花』も彫り込まれた。その本殿の御扉

の左右に施した四枚の部戸は、大きな一枚板が蜂の巣のように多くの亀甲模様彫り抜かれ、その全てに美しい花の絵が描かれた。幣殿の内側欄間には神君家康公が狩野派の絵師に下絵を描かせた春夏秋冬の彫り物が、また外側欄間には松や竹などとともに花鳥風月画が彫り込まれた。何れも五穀豊穡を祈つてのものだ。ことに描かれた松や竹、紅葉、桜などの絵柄は柱を飛び越して描くよう清兵衛は指示した。この時代、他所には類を見ない意匠を取り入れたのであった。本殿をはじめ拝殿や幣殿の周りは家康公の配慮で呼ばれた紀州の鋳職人により、見事に彫金された『鋳金具』と『釘隠し』で覆われた。

楼門の四隅には『喜怒哀楽』を表わす阿吽の対の八枚の面があり、これは全国十萬社程もある神社でも他には全く例を見ないこの独特のもので、「喜」と「楽」の面は楼門の内側に、「怒」と「哀」は外側に向かって飾らせ、清兵衛はそれを『人吉様』と呼びさせた。

また『明国二十四孝』の親孝行物語のうちの六つが彫り込まれた。全ての社殿や楼門はすでに赤や黒の漆を何層にも塗りあげられ、鋳金具も釘隠しも美しく輝くばかりで、これこそ『桃山ぶり』をおわせる誠に見事な造作であった。

さらに清兵衛は鋳職人に対し、宣教師コンスタンチオから

## ■主な登場人物

相良清兵衛（犬童頼兄）＝相良家 家老  
丸目蔵人佐（鉄斎）＝相良氏家臣の兵法家  
相良頼房（長毎）＝相良家 第20代当主

聞いていた♥の印を建物のいたるところに施すように指示した。『猪の眼模様』はもちろん古来より厄除けや火除けの意味があつたが、実はキリスト教でマリア様を表わす『♥』印、またはや完全なる『偽装工作』である。呼び寄せた鎧職人だけで作るのには無理があつたので、地元の鍛冶職人や左官等に製法を習わせ、楼門や幣殿、本殿など、社殿全ての垂木の先の上下左右に♥模様の入った金具を付けさせた。膨大な数の『猪の眼模様』が施されたのである。『垂木』に施されたそれは他の鎧金具や釘隠しとは明らかに違い、急ごしらえのまさしく素人の作で、猪の眼・♥印の総数は、なんと八千二百を超えていた。

なぜ他に類を見ないこのような膨大な『猪の眼』が施されたのか。戦の無い平穏な世の中を心より祈つての事であつた。島津の命を受け甲斐軍と戦い、更には豊後・大友を攻め、そのうち秀吉の命により『唐入り』を果たし、幾多の苦勞を重ね戦功を挙げ漸く無事に生還し、さらに『関ヶ原の戦い』の折に岐阜大垣城では、西軍の将石田三成を裏切つて徳川方に寝返り、僅かではあるがこの二万二千六百六十五石の領地を護り抜いた末での建造であつた。

『もうあのようなむごい戦いは二度と決して起こしてはならぬ、アーメン』

重陽の九月九日、青井阿蘇大明神落成の祝いは盛大にとり行われた。丸目鉄斎率いるタイ捨流の演武も、能も神楽も流鏑馬も誠に見事であつた。

「御家老、猪の眼の♥模様をなんとかこういう形でしつらえましたか。これなら誰もそれは気付きますまいて。またなんとこの数の多さよ。さすがで御座りまするな」

丸目蔵人佐入道鉄斎は皮肉を込めて清兵衛に言った。

「丸目殿が引き合われた宣教師コンスタンチン才殿から伺つたので、それで急ぎ鍛冶師や左官、大工らに造らせたのでござる」

「ああ、あの時の事でござりましたかのう。それでこの数になつてござるか。成程承知」

八千以上もの猪の眼の模様が社殿の至る所に配されていたのだつた。

城を取り巻くようにして護つていた社寺の造営も一気に進んだ。それらには小豆島から来た例の『石灯笼』も置かれた。瀬戸内の小島から石灯笼を運んだ小豆島の衆は、新馬場の北側の『唐人町』近辺に住む事となり、その後清兵衛の計らい

で岡麓城前付近に移り、更にそののち『幸野溝』開拓にも従事し、未開の地を開墾して住み着いた。そこはのちに『小豆島村』の名が付けられた。

再建された井ノ口八幡宮では『流鏑馬』がとり行われ、完成した青井大明神を先頭に、矢黒や遙拝、若宮社などをはじめ、領内の各神社で神楽と共に奉納される事になった。

目出度いことが続いた。その暮れに内蔵助ととき殿に長男が誕生した。清兵衛にとつて待望の初孫となる喜平次である。

『秘薬天金丸』の効果であつた。

完成した城下の町家には商人も移り住み、日によつて市が立ち、人も物もいつばいで賑やかな日々が訪れた。中心部の九日町の辻には商売繁盛を祈願して恵比寿神社が祀られた。紀州の鎧職人から多くの技術を得た職人らには細工町が街の北側に造られ、刀のつばやかんざし、最近伝わったばかりの『煙草』を吸うための煙管(きせる)ものちにここで作られるようになる。

穏やかな日々が過ぎた。

人吉城のある一帯は小高い丘になつているが、その周りを

囲む平地のさらには先には四方を取り囲むように二千米越えの山々が連なつている。実は九十万年ほど前のこの地は、琵琶湖に次ぐ大きさの湖であつたという。人吉から西へ二里半程の球磨村渡に、十萬年以上も前に地殻変動で隆起した地層があり、そこは九十万年から二百五十萬年前の地層で、幾度の地殻変動によつて隆起したものだ。湖であつた痕跡は盆地のあちこちに点在している。湖はのちに最西の大坂間辺りの地盤が崩れ、湖に溜まつていた大量の水が流れ出し、大きな川となつて八代海に注ぎ、人吉盆地が出来上がったのだ。

当主である長每公は、毎年の大晦日は青井社社殿にお参りを済ませ、幣殿に籠つて一夜を明かし新年を迎えられるのが通例であつた。十六代義滋公の頃はお城より球磨川を挟んで北東にある『無量寿院』で年籠りをされていたが、祖父にあたる十七代晴広公が世襲した年から青井社で年を越されるようになった。父親の十八代義陽公の頃は八代が相良家の拠点となつていたので、主に妙見社で年籠りをしていたが、八代を島津に奪われてからはまた青井社で年籠りをするようになる。

無量寿院は久しく閑散として廃墟となり、後に清兵衛が再

興した。

【やまぐち・けいじ／人吉市】

# 倉敷便り

25

絵と文／原田正史

## 第二回津軽紀行②

青森空港からのバスが、弘前駅前に着くと、私たちは早速、タクシーで弘前城に向かいました。到着した弘前城の前のタクシー乗り場には、紅葉の観光シーズンとあって、十台を超えるタクシーが並んでいました。六月に来訪した時には、走っているタクシーを呼び止めるのに苦労したことを思うと大変な違いです。追手門<sup>おうちもん</sup>を出入りする人も多く、タクシーにとっては絶好の稼ぎ時のようです。弘前城への来訪者は、他県からの観光客ばかりではなく、快晴に恵まれた休日を楽し

む弘前市民や、弘前周辺の人たちも含まれている様に思われました。

弘前では春の桜、夏の弘前ねぶた、秋の紅葉が三大観光シーズンとなつていくのです。追手門から出て来る人たちの中に、観光客とは全く異なる一団が目につきました。それは薄緑色の作業服を着用した弘前市役所観光課の職員さんたちで、その殆どが女性でした。城内に入ってから、別の職員さんたちの仕事の様子を見たのですが、熊手や箒<sup>はちまき</sup>、あるいは吹き寄せ機を使つて、道路一面に広がり積もつた落ち葉を手早く掻き集めて、搬送車に投げ込んでいました。力のいる仕事ではないので、女性向きの仕事だと言えそうです。

それにしても観光を市政の大きな柱として弘前の実態に即したものであり、高く評価されることです。

しかしながら弘前に相良町という個人名を残したたった一人の人物であり、私たちの郷土球磨地方における最大の偉人でもある相良清兵衛<sup>さかちらせいべゑ</sup>についての認識が、弘前市の公的な機関において極めて貧弱なことは残念なことです。したがって一般の人たちは、相良町の由来などについては勿論のこと、相良清兵衛という名前さえ知る人はいないという、実に哀れな状態なのです。このような現実は何といつても、弘前と人吉とが遠隔の地であることに起因するものと思われま

江戸時代初期の創建とされる追手門も、今回は素通りすることなく使用されている木材や石材が切り出され、運ばれてくる過程や設計や建造をはじめとした場面で追手門の完成に貢献した人たちの苦勞に恩を馳せながら通過しました。日本一の桜の景観の一つを構成する天守閣は、依然として本丸内部に引き込まれたままでした。崩れ落ちてしまった天守閣



本丸内部に引き込まれた弘前城天守閣

が建つていた石垣は、一部を残して別の場所へ運び去られており、むき出しになつた裏側の土層に修復工事の人が四、五人張り付いていました。土層は自然の状態で、築城された時の本来のものではなく、色も組成も違う各種の土を連続性のない複雑な状態で積み上げたものでした。この実態からすれば、この石垣は築城以来何回も崩落を繰り返していることが明らかであり、更に今回修復されたとしても再び崩落することは確実であると言えます。

城郭の石垣が地震や大雨などで崩れるたびに、いつも思い浮かべるのは、半永久的に安全を確保する修復工事は無いのかという言つことです。思いつくのは石垣の裏側を幅広くセメントで塗り固めるセメント工法です。この工法を使用すると、その上に建つ建

造物も安全性が向上するのですから一石二鳥そのものです。更に連続的に繰り返される税金の無駄遣いも解決出来ることになります。勿論、文化庁は文化的・歴史の見地からセメント工法を認めないでしょうから、実現することは無いと言えますが、セメント工法が合理的な方法であることは確かなことでしょう。

ここから西側に少し入った堀沿いの道路には真っ赤に紅葉した楓<sup>かえで</sup>の古木と、真っ黄色に紅葉した樹種不明の大樹とが並び立ち、抜けるような青空に映えて、絢爛<sup>けんらん</sup>たる北国の秋を出現させていました。この場所には大勢の観光客に混じつて、プロと思われる写真家たちが、大きく重そうなカメラを両手に持つて身構えたり、地上に据えた大型カメラを中腰の姿勢で覗き込んだりしていました。やはりここ

# おっとわっとあすび その②

絵と文／松舟博満

が弘前城における紅葉観賞の最高の場所なのでしょう。地元の人の話では、舗装道路やコンクリートなどの建物が多い市街地に比べ、堀に囲まれ植物の生い茂る弘前城では、気温の低下が急激で、見事な紅葉が一気に出現することのことでした。

弘前城の次には日本最初の世界遺産であり、広大なブナの自然林が広がる白神山地の紅葉を見ようというものでした。ところが観光案内所の説明では、白神山地まではかなり遠く、時間的に無理とのことでした。そこで白神山地の途中にある岩木山の山麓を目指すことにしました。しかし全く土地勘のない私たちですから、岩木山に最も近いバス停で降りることにしました。

次第に岩木山が迫ってきました。丁

度真下と思われる所に大きな神社がありました。ここで降りようと身構えたのですが、バスは無情にもそのバス停を通り過ぎてしまったのです。次のバス停はかなり離れた所にあり、神社まで歩くのが大変でした。途中、大きな墓地があり、大半は現代墓ですが、端の方に古い真つ黒な大型墓碑が立ち並び一角がありました。年号から江戸時代後期の墓碑であることが分かり、戒名の末尾に「阿闍梨法印霊位」などと刻記されていたことから修験道、すなわち山伏の墓だと思われました。その後、案内板を見たら、この岩木山神社は神仏混淆だった江戸時代以前には山伏の修行の場所であり、岩木山そのものが修験道の一大聖地だったことを知りました。したがって私たちが見た大型墓碑は当時の岩木山神社に直結するものだったのです。

それにしても真つ黒な墓石は私たちの郷土で、古い時代に墓石として広く使われた阿蘇溶結凝灰岩に類似するものでした。この石は岩木山から噴出した凝灰岩であり、岩木山の山麓に採石場があったようです。人力によつて採石・加工した江戸時代以前は、溶結凝灰岩のような軟らかくて整形しやすい石であることが墓石としての必須条件だったのです。したがって名前はその土地によつて違っていても溶結凝灰岩に分類される石が墓石として全国的に広く利用されていたのです。

山頂に冠雪を載せて光り輝く岩木山を間近に仰ぎ見ること出来た私たちは満足した思いで、再び弘前駅に戻りました。

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

## つくしんぼうの タマゴトジ

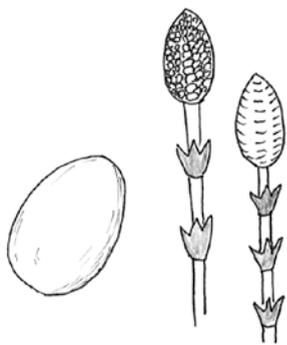
さんか(寒い)とんしまゆれば、葉よま先んツラ出すとんあつた。

日当たりん良か南向きの土手んところが早かつたで、行たて見れば枯れとつ草ば押しつけてツクシンボウのツラ出やとつたで、なっただけ根元ん方から採つたつちや、長さも高こう低うあつたでワラじんごてえくびりやなんじやつたで、手に持ちきつしこ持つて戻れば「こんくりやじゃタマゴトジやでけんで、味噌汁んの中きや入れつくるつで」て作つてくれた味噌汁ば食えば、正月ん雑煮ん中きやひやつとる、戸越ん三日原ん長モヤシンごてして

シヤキシヤキしとつてんまかつたばつてん、どぎやしてんタマゴトジば食おうたつたで、茶摘テゴば下げて、一箇所じゃ採りうせんじやつたで日当たりん良か所つば何処其処さりいて採つてもどおつた。

味噌汁ん入れらつ時にや数んしれとつたで、母さんのハカマば取つてくれおらいたいどん、タ

マゴトジすつてにや数のううかつた(多かつた)もんで、他んこつばしおつやる母さんの「ハカマどまあ我がで外せば、作つてくる」て云わいたで、四つから五つある節のハカマば一ちよづつ爪ば立てて横さみやぐるつと剥いたごてして取つとばつてん、どぎやしこ取つたつちや残りん方がううかで、ほとときつかやあつとつけえ母さんの来とつて、ハカマば取つてくれやいたもんで何十倍もはかどつて、外じいてしまえば煮てくれらいた。砂糖と醤油で味付けばして、煮おつやれば段々味のしみくうでつくしんぼうは、半分もなかごて減つてしもうとつた。



【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

# お休みどころ通信 ③

## 九州大金魚博覧会に参加する

精神科医 興野康也

妻の美紗さんが金魚に関心がある  
と最初に知ったのは、たしか新婚旅  
行で行ったオーストリアのウィーン  
の動物園だったと思います。世界  
最古の動物園であるにも関わらず、  
コウモリの飛び交うなかを通り抜け  
るといった斬新な展示や創意工夫が  
溢れていて楽しかったです。そのな  
かに世界の金魚が展示されている一  
角があったのです。僕の記憶違い  
でなければ、たしか美紗さんが喜ん  
だんだと思います。

それから何年も経って、娘のやす

みがお祭りの金魚すくい金魚をも  
らってきたことから、美紗さんが金  
魚を飼い始めることになりました。  
この最初の飼育はうまくいきませ  
んでした。ほとんどが死んでしまっ  
たのです。

本を買って飼育法を調べていくう  
ちに美紗さんの金魚熱に火が付き  
始め、本格的に金魚を飼うことにな  
りました。インターネットで調べ  
て見つけた、宮崎市の金魚屋さん「ア  
クアプラン金魚館」に行ってみました  
た。お店の方は一見愛想のいい方

はなさそうですが、お話をするとか  
なりの金魚への愛情や金魚を普及さ  
せたい気持ちで運営されていること  
がわかります。この方いい飼育グ  
ズを教えていただいたり、いろんな  
金魚を見せていただいたりしたので  
した。

美紗さんの好きな「らんちゅう」  
や出目金などを飼つていまに至りま  
す。いまではらんちゅうの仲間は大  
きいもの5匹、小さいもの6匹、土  
佐金1匹、出目金の仲間3匹が家  
にいます。お世話をするのは美紗さ  
んで、僕はたまに水槽を洗う手伝  
いをするくらいですが、家族が増え  
たような気がするのです。

その後熊本県長洲町にある「金  
魚の館」に行ったり、ハウステンボ  
スで金魚とお花のコラボの展示を見

たりしました。ただ僕たちは金魚  
の品評会には行ったことがなく、一  
度本格的に展示を見に行つてみたい  
と思つていました。そのときインタ  
ーネットで見つけたのが、「九州大金



博覧会には金魚の無料配付コーナーもあった。響がほしいと言い、小さな「琉金」をいただいた

魚博覧会」です。あくまでもインタ  
ーネット上の記事によればですが、ス  
タッフの方は金魚文化を残したいと  
いう気持ちで赤字になりながらされ  
ているそうです。去年は行けなかつ  
たのですが、幸い今回は祝日が休め  
ましたので出かけてみました。  
今年の11月23日、その博覧会に  
行ってみました。福岡県のみやま市  
にある「東照寺」というお寺が会  
場です。着いてみると、大々的に金  
魚博覧会をやっているという感じで  
はなく、意外でした。ですがお寺の  
境内に出店があり、金魚の無料提  
供があったり、安くでいい金魚を買  
えたり、金魚すくいをできたりしま  
した。響が金魚を欲しがり、やす  
みは金魚すくいをしたり、美紗さ  
んも出目金を買って、また金魚が増

えました(笑)。

僕は知らなかったのですが、金魚  
を飼う文化の歴史は古く、江戸時  
代には確実に品評会があった記録が  
あるそうです。金魚の魅力は美しさ  
だけでなく多様性にあり、遺伝的に  
はそれほど差がないはずなのに、色  
や形に大きな違いが生じます。さら  
に原種のフナに戻ろうとする傾向が  
あるため、何万匹もの稚魚のなか  
から美しくなりそうな魚を選び抜  
く作業を根気よく繰り返さないと、  
見た目に美しい金魚は生まれな  
いのです。金魚の美しさはある種の奇  
形のようなものであり、非常に人工  
的なものですね。

【おきの・やすなり／人吉市】

# 稲留三郎の世界 ⑨

——年中行事をたどってみよう——



前田一洋

『熊つれづれ咄』の最初は、正月のことから書き出してあります。たまさか平成もやがて幕、新しい年号が示されます。それでは早速、年号のくだけから読んでいきましょう。

「トトさん、年々の年号ちゅうもなア、いつ出来つろうか」「おれは昔の事ア知らんがねー、年号がならんば年数が分からんで。昔の王様に孝徳天皇と申したてまつる王様、始めて大化という年号をお始めになった、これが年号の始めたい」

が、たったの三日。それを過ぎたら新年度で、お盆まで集金することはできないのだ。

泣いたのは公務員も同じこと、十二月は三日間しか出勤しなかったので、給料もボーナスもカットということに。さらに首吊りまで出たのが暦の出版元。まだ木版の手刷りでしたので、一枚でもかなりな値段。それが全てただの紙屑、それこそ泣くに泣けなかった。

そんな「悲劇」をよそにホクソ笑んでいたのは誰でしょう、そうです大蔵大臣。何しろ莫大な国家予算が浮いたのですから、まさにウシシシシ。もう一人、えっ貧乏人？ どうして。そりやそうでしょう、便所や床下に隠れるのが、たったの三日で済んだのですから。往時の支払い

ご存じ、中大皇子（天智天皇）や中臣（藤原）鎌足などが蘇我入鹿らを滅ぼして行なった政治改革、いわゆる「大化の改新」。それは西暦645年、孝徳天皇が即位され日本での初めての年号「大化元年」となりました。

「そんならば、年中に色々の事があり申すが、そのわけを言うて聞かせて下さんし」。

「そうちゃーは俺も知らんがなア、なれども荒々語ろうばい。先ず正月

は盆前と師走それが大幅短縮。

「雑煮、唐の世立春に餅と生野菜と食うを名付けて春盤（しゅんばん）と言う、倭俗の雑煮これなり。昔は三ヶ日、イモ・ニンジン・ゴボ・コナ・田作ノナマクサキヲ以て祝儀とする」

「七日の七種菜（ななくさ） 大宗家訓に言う、七種のワカナを取りて調いて、氏神ならびに所の三宝、次に父母に献じた後に食すれば年中の病を治す」

「十四日の晩 賤男女（シヨンナメ）作るごと、何れの書も見えず。賤男（シツノヲ）賤女（シツノメ）翁（おきな）問答にあり。土龍（ムクラ）打ちあり」

「十五日 餅粥（モチカ） 世風記に言う

正月十五日には小豆粥を煮て、天狗のために祭る。また呉県の張威と

のこと。正月は年の始まり、月の始まり。元日は日の始まりなり。よって正月元日は元三・元旦・元日と言うは、年の始め月の始め日の始め、三つの始めゆえに言いたい」

「元日の朝食う餅を（なししゅう）歯固めちゅうどうか、言うて聞かせられよ」

「これは色々説があれども、一つの咄を語ろう。歯をもつて命とする故に、歯の字をヨハイと訓す、故に歯固めは寿を固むる義なり。新年は、明治五年十二月三日を以て、明治六（1873）年一月二日に定めらる」

従来のフルつまり「陰曆」から、全く新しいシンの「太陽曆」に変更になったのは、国民にとつてまさに「寝耳に水」でした。そのために商人たちが売り掛け金を取って回る師走

いうもの、夜起きれば宅の東南の角に一婦人立ちて、手をあげて張威を招くを見る。張威怪しみて近付きければ婦人のいわく、この地は君が家の蚕室なり。我はこの地の神なり。明年正月半ばの十五日に白粥を作り、膏（あぶら）を上にかべて我を祭るべし。しからば君が蚕桑、百倍ならしめん。しかるに張威、正月十五日は膏粥を作りて祭る。大いに蚕を得たり」。

今では全く消えてしまった行事が、こうした几帳面な記録、しかも当時使われていた球磨方言で記されているのです。今年も宜しくお付き合ひ下さい。

謹賀新春 己亥の歳

【まえだ・かずひろ／人吉市】

# 病氣と私 ①

瀬戸致行

私は子供の頃から虚弱体質であった。昭和8年9月29日に長崎市出島の産婦人科で生まれた。実は私の母が長男(致良)の出産の際(熊本市内京町本丁にて自宅出産)、出血多量で当時の福田先生(令寿様)現在の福田病院の二代上の医師)の往診を仰いだと聞いている。私を出産した時も出血多量の為、医師と私の父が腹帯で結んで圧迫したと言っ。

母は後年「血小板減少病」になり、それも原因で死去した。丁度、私が学会で長崎に行った折、訪ねたが、もうその産婦人科はなかった。

幼児の頃(福岡市在住)もバナナ、桃など食べられなかった。その頃の自慢は小学生になる前に体温計を読むことが出来ることだった。又、畳敷きの部屋で、病気で蒲団に寝ている私の顔に新聞紙を拡げてかぶせ「茶がら」を

蒔いて掃除をする母の姿が記憶に残っている。

当時は私が自家中毒?で高熱、下痢をすると、母は私の胸に辛子湿布を巻き、熱い熱いと泣く私だった。又、父は「ひまし油(下剤)」を飲むように云い、その臭いと味に服用を拒否すると、父は床の間に飾ってある先祖伝来の刀を抜き「この薬を飲まないと斬る」と云って脅すのだった。

福岡市の小学校に入学(1週間だけ)し、父の転勤で名古屋市に行き、小学1年生、更に大阪市に転勤となったが、病氣、病弱で殆ど通学せず、その頃(昭和16年12月8日)あの忌まわしい馬鹿げた、アメリカとの戦争になった。

食糧事情が悪くなり、父は大阪市の裁判所検事を降格し、少しでも食べる物が入る熊本市に転勤し、私は肺門リンパ腺炎(小児結核症)として1年休学し、昭和9年生まれと同級生となった。

熊本市の学校は坪井町の壺川小学校であった。その頃の食料不足を母の里の球磨郡渡から補給していただき有り難かった。

当時(未だ空襲などない時)、新市街の映画館に父と兄と私と3人で戦意高揚映画(マンガとエノケンの「法界坊?」)を観に行った記憶がある。エノケンの映画は彼

が扮する第五高等学校が、五高の武夫原(ぶふうげん)で夢をみるだけだった様な気がする。父はこの「武夫原」を私に見せ、進学してほしいと思つて映画に連れて行ったと今でも思う。自宅(京町本町)への道程は熊本城内を通り4~5km以上あったと思う。

父は城内の「ぼあん坂」あたりから、自分の背中を私に向け京町本町まで背負つて帰つてくれた。厳しい父であり優しい父であった。

その父が突然脳出血(私と同じ)に未だ48歳でかかり検事を辞職し、鹿児島市で公証人となることとなり、私は小学校4年生早々に鹿児島市山下小学校へ入学したが、鹿児島では郷中教育で体操が主力として行われた。私もこわごわ加わり、その頃から少しずつ病気をしなくなった。兄は鹿児島県立第二中学校(九軍神の一人横山少佐卒業)に父から勉強を教えてもらい昭和20年4月に入学した。その4月に鹿児島市がアメリカ力艦載機の爆撃を受けた。



明治20年竣工当時の五高(現熊本大学五高記念館)

【せと・ちこう／人吉市】

# お正月には凧あげて コマをまわして

佐無田 護

私たちの子どもの時と比べると、今は子どもの遊びも変わってしまった。フツと昔のことが蘇ってきた。

遊びの道具は自分で工夫したものだ。凧揚げにしても自分で竹を削ってヒゴを作り組み立てて、習字紙を貼った。凧よま（大きめの糸）で上げていたが、風の弱い日にはよまの重みで高く上がらない。そこで、一計を案じミシン糸なら軽くて強いから、高く上がるに違いないとコソッとミシン糸を持ち出し凧を揚げてみた。案の定、凧は高く高く上がった。

思い切り糸を伸ばし十分に楽しみ、凧をおろしたが、アツと驚いた。ミシン糸が手垢で黒くなっていたのだ。また、コソツとミシン糸を返しておいたが、ばれないはず

して一番最後まで回っていた者の勝ち。勢いよく良く地面にうつつける。次第にこつを覚えるとコマは「うなる」ようになる。クーンとうなりを生じ動きまわる。次第に動きを止め「すむ」状態になる。「すむ」とは動きを止め、止まっているようにジーツとして回っている。このような状態にならないと「ながだんき」には勝てない。

一番はまったのが「うつつけあい」。二人での勝負。一人が「おきコマ」をする。その回っているコマをめがけて力一杯「うつつけ」る。相手のコマに命中して、コマを転がした上、自分のコマが回っていれば、自分の勝ち。また、続けて攻撃が出来る。なかなか命中させるのは難しい。しかし、だんだん出来るようになる。

命中すると当然相手のコマには傷が付く。それが楽しいのだ、上級生の中には「よき芯」を使う者まであった。「よき芯」というのは、コマの芯が「よき」の形をして尖っている。命中すると相手のコマはかけたり、たまには割れた



はない。こつびどくしかられた。

先日、おもちゃ屋さんでコマを買いに行ったが、店には置いていないとのこと。コマを置いていても、買う人がいないからとのこと。昔は小さな店にもいろいろな大きさや種類のコマが売ってあったのにと淋しくなった。結局お土産屋さんにあるのを見つけて買って帰った。

小さい頃、上級生が上手にコマを回すのを見て自分も出来るだろうとやってみたが、全くまわらない。上級生がやるように「うつつけ」を真似たのだ。「うつつけ」は手を上から勢いよく振り下ろすやり方だ。

すると上級生が「そぎゃんこつばしたっちゃわかろうきや。うつつけはまだ早か。引きコマから始めんばと言つて「引きコマ」のやり方を教えてくれた。勿論それでもすぐはまわらなかつたが、だんだん上手になってくると今度は「うつつけ」のやり方の手ほどきをしてくれた。引きコマでコマのまわし方の要領を身につけていたから、今度は割に早く回せるようになってきた。

上手になると、コマのいろいろな遊びが友達みんなと出来るようになった。一つめは「ながだんき」。一緒に回しする。勝負用のコマだった。もう一つの遊び方は「ばんびゅー」という回し方。少し芯の長いコマを使って、10m以上も遠くまで投げて回すやり方。遠くまで投げるので、今で言えば危ないからやめると言われるだろう。これは引きコマの変形だった。

コマ回しが流行って学校にまで持っていくって、休み時間には飛び出して回ってコマを回していたものだ。しかし、やはり「学校でのコマ回しは禁止」というお触れが出た。今考えても当然とは思つたが、コマ回しは次第に廃れていった。あんなにおもしろかった遊びが昔の遊びとなり、コマが玩具屋さんにも売っていないというのは寂しいものである。

## コマの芯 (よき) のつ

コマを買いに行った時のこと、当然ひもも一緒に買うのだが、売っているのは口のひも。元も先も同じ大きさのひもである。ひもの先が大きいと芯にきっちり巻きつけられることが出来ない。これでは「うなる」ようなコマは回せない。理想的なひもは、芯に巻き付ける部分は細く、

そこからだんだん大きくなるようなひもでなくてはならない。このようなひもは麻の芋を編んだものが最適であった。しなやかで強く長持ち。根元は大きく先になるに従って細くなる。ひもの細い部分をねちちて（口で舐めて）芯に巻き付けると、きつちり固定できる。このような麻の芋のひもを持った者が当然ながらコマ回しは強い。

しかし、自分はとうとう麻のひもを手にはなかつた。ではどうしたか？ 子どもながら考えた。「稲の藁を使ってみよう」。稲藁の素性の良い物を選んで水で湿して良く叩いて縄のように編んだ。これなら麻のひもによく似ている。しかし、コマに巻きつけると、縄がほどけてしまう。なぜだろう。また考えた。そうだ、左よりに（縄のない方、左手を出して右手を引く）してみた。そうしたらうまくいくことが分かった。

しかし稲藁の悲しさ、長持ちがしない。一日しか持たない。時には一日に何本もの縄をよらなくてはならなかつた。でもこれで結構遊ぶことが出来た。

小学校の3年生くらいの時、高等科の上級生が「お前はコマ回しの上手かげね、おっと勝負すつぞ。」「うつつ

けあい」の勝負だ。相手はずっと年上。しかも麻の芋の「よま」を持っていた。それでも稲藁の「よま」で一生懸命に頑張った。しかし、麻の芋の「よま」と稲藁の「よま」では年の差以上に悲惨な結果になった。買ったばかりの美しかったコマが傷だらけ。無残な姿になり、とうとう泣き出してしまった。

しかし、稲藁の「よま」でも上級生と対戦するくらい優れていた。普通のひもで元から先まで同じ大きさの「よま」よりずっと良いと今でも思っている。

先日、近くの神社のお祭り、社殿の中のしめ縄を張り替えた。これは年中行事だが、神社のしめ縄は「左より」だ。普通の縄と反対のより方なので、これには苦勞する人も多いのだが、私は難なく左縄をよることが出来た。これも子どもの時の遊びのおかげだ。

【ごむた・まもる／人吉市東間上町】

## 奥球磨、湯前町の偉人 那須良輔と北御門二郎 ①

村木正則

### 一、奥球磨の偉人

私が入吉高校を卒業し、郷里の人吉・球磨を離れて半世紀近くになる。私は昭和二五年生まれで代代的には、団塊世代の兄弟で団塊ブラザーである。多くの同窓生も同じように進学や就職で人吉・球磨の盆地を巣立って行った。人吉・球磨の知名度は全国的にみて高くないが熊本県の南部の九州山地に囲まれた人吉盆地（東西約三〇km）を中心とする地域で、中心城市は人吉市（人口約三万三千人）である。地図上では人吉盆地と表記されているが、私はクマン伝説の伝わる歴史的地名として球磨盆地と呼びたい。この人吉球磨地方を歴史作家の司馬遼太郎さんはその著書「街道を行く」の中で「日本でもっとも豊かな隠れ里」と記している。また二〇一五年（平成二十七年）に「相良七〇〇年が生んだ保守と進取の文

化」地域として、文化庁によって熊本県で第一号の日本遺産に認定されている。この盆地を東西に貫流しているのが日本三大急流のひとつ球磨川である。この盆地の東方に霊峰市房山（一七二二m）が凜として空を刺すように佇んでいる。この市房山が見下ろす地域に、湯前町・水上村・多良木町があり奥球磨と呼ばれている。私はその湯前町出身であるが、湯前町（人口約四千人）は人吉から東方へ電車・車で四〇分（約二五km）に位置しその東は宮崎県と接している。球磨川とほぼ並行してくま川鉄道（第三セクター）があり、湯前駅は人吉始発の電車の終点で市房登山の最寄駅である。

私は上京以来予期しない三度の大病に患わされ波乱万丈の人生をおくることになった。心に余裕がなかったせいかこれまであまり故郷を振り返ることもなく年月が過ぎた。定年を過ぎて少し心の余裕ができて人生を振り返ることも出来る様になった。今日無事であることに感謝し今後もかけがえのない人生を大事に生きたいという思いでこの間二冊の本も出版した。同時に故郷である人吉・球磨を還暦過ぎた眼差しで見直すとき今まで気づかなかつた大切なことを発見することがある。

私の故郷湯前町には偉人と呼ぶにふさわしいふたりの人物がいたことも上京してから発見したことである。ふたりは同

時期に湯前町に生まれた。そのひとは政治漫画の巨匠那須良輔<sup>りよふけ</sup>さんで、もうひとはロシア文学者、トルストイ研究家の北御門<sup>きたみかど</sup>三郎<sup>ざぶろう</sup>さんである。ふたりは共に一九二三年(大正二年)生まれである。私が在郷中は名前くらいしか知らずまた教えにくれる人に出会う機会もなかった。私が本を出版することになりその編集出版を担当して頂いた出版社(青風舎)を通して北御門三郎<sup>きたみかど</sup>さんを知り、さらに故郷への関心が復活する中で湯前まんが美術館を知り那須良輔<sup>りよふけ</sup>さんのこともより詳しく知ったのである。それぞれの生涯を辿ってみるとそれぞれの道の巨匠、偉人と呼ばれるに相応しい人物であることを再発見することが出来た。私にとっては新鮮な感動であった。

二人の実家は湯前町内でも近隣地区(染田地区)であった。私は縁あって本誌の定期読者になったが、本誌二〇一七年に那須良輔<sup>りよふけ</sup>さんに関する記事「湯前まんが美術館」(那須良輔記念館)が連載され、その設立の経過と苦勞がよくわかった。またトルストイ編集、北御門三郎<sup>きたみかど</sup>翻訳の「文読む月日」が「今月の一言」で毎月紹介され現在も連載中である。私が定年後最も関心のあるところは平和主義である。私の私的関心の視点からおふたりは大変興味があり、いろいろなお話を直接お聞きしたかったが、今となっては叶わぬことで残念でならな

い。本誌にお二人に関する記事を目にする度に私の思いは高揚し、筆を執ることにした。私はおふたりと同郷であるので親しみを込めて良さん三郎<sup>りよふけ</sup>さんと略称で呼ばせて頂きたい。偉人と呼ばれるにふさわしいおふたりの足跡を辿ってみることにしたい。

## 二、風刺漫画の巨匠・那須良輔<sup>りよふけ</sup>

那須良輔<sup>りよふけ</sup>さん(以下良さんと略す、一九二一〜一九八九)は湯前町下染田生れである。

良さんは子どものころから釣り好きで明るく活発な少年だった。釣りについては良さんの生涯の趣味となった。子どものころは故郷湯前の都川(球磨川の支流)や球磨川、上京してからも皇居のお堀、上野不忍の池、戦地の中国、転居した鎌倉でも釣りをした記録がある。一九七二年発行の漫画家の紹介を兼ねた漫画集団漫画集(グラフィック社)というのがある。その中の良さんの紹介の欄でも「是々非々の辛辣な国際政治漫画は、遠くニューヨークタイムズにも転載。釣りと酒の話には細い目をさらに細める」と紹介されている。良さんの釣り好きは仲間でも有名だったようである。良さんが

漫画家という職業に結びついた直接の趣味は絵を描くのが大好きな少年だったことである。良さんは時間があれば紙や地面に絵を描いていた。その描写力は天性のものだったの付近所や学校で評判の子どもであり、「全国小学校図書作品展」で二年連続二等を受賞している。

絵を描くことが何より好きな良さんは一大決心をして、昭和七年一九歳のとき洋画家を志し、親戚中の反対を押し切つて故郷湯前を離れて上京し、東京の太平洋美術学校予科(中村不折校長、我が国最古の美術団体、前身は明治三五年創設の太平洋画会)に入学した。私は良さんの入学を確認するため二〇一八年二月、現在荒川区西日暮里にある太平洋美術会を訪ねた。スタッフの皆さんの協力によって調べて頂いた直接の資料は発見できなかった。同校は戦争中空襲にあったことや引越しをしておりかなりの資料を消失しているとの説明があり資料発見は絶望かと思われたが、その後スタッフの皆さんのご尽力で良さんと同時期に在学していたと思われる学友(昭和八年同校卒)のご遺族から同氏の私的学友名簿が残されており、当時の学友名やそのプロフィールが記録されていた。ご遺族からそのノートのコピーの提供があり、それには確かに当時の学友であったと思われる「那須良輔」の欄

があり名前が記されていた。

それによると「大正二年熊本県生まれ、太平洋美術学校卒、清水崑師事、政治漫画家、毛筆漫画家最後の一人、毎日新聞社嘱託、漫画集団会員」と記されている。これにより良さんが同校に入学して在学していたことはほぼ確実と推定される。良さんは学資を稼ぐために夜はアルバイトをしながら学校に通い洋画の基礎を学んだ。また好きな漫画を描き雑誌社に投稿を続けた。そして情熱と才能が認められ昭和八年、二〇歳のとき「日本少年」(実業の日本社)に投稿原稿が採用された。それを機に同社の専属となった。副業であった漫画が本業になり、良さんの漫画家人生の歩みが始まったのである。良さんの才能は一気に開花し水を得た魚のように活躍した。連載の「のんきな殿様」「吾輩はノミである。」等がヒットし、たちまち売れっ子の漫画家となった。しかし、時代は戦争という暗黒時代、良さんは戦争中に三度召集をうける。

一九三七年(昭和二年)七月に第一回目の召集をうける。戦地は中国であったが途中病に倒れ召集解除となった。その後昭和三年三月に実業の日本社の従軍記者として再び中国に渡った。そこで再び召集令状をうけたので一旦郷里湯前へ帰ることになった。そして昭和二年六月に所属する熊本松

前号【くまがわ学習塾②④の答え】

問1 十二支をあげよ (例:亥)

- ① ( 子 )
- ② ( 丑 )
- ③ ( 寅 )
- ④ ( 卯 )
- ⑤ ( 辰 )
- ⑥ ( 巳 )
- ⑦ ( 午 )
- ⑧ ( 未 )
- ⑨ ( 申 )
- ⑩ ( 酉 )
- ⑪ ( 戌 )

問2 相良義陽に関係する人物名をあげよ (例:島津義久)

- ① 相良晴広 (義陽の父)
- ② 甲斐宗運 (阿蘇氏の家臣。響野原の戦いで義陽と対峙。義陽の首をとる)
- ③ 千代菊 (義陽の正室)
- ④ 相良忠房 (義陽の長男。相良 19 代当主)
- ⑤ 相良長每 (義陽の次男。相良 20 代当主)

問3 駅伝競争の大会名をあげよ (例:箱根駅伝)

- ① ( 全日本実業団対抗駅伝競争大会 )
- ② ( 全日本実業団対抗女子駅伝競争大会 )
- ③ ( 全国高等学校駅伝競争大会 )
- ④ ( 全国中学生駅伝大会 )
- ⑤ ( 富士登山駅伝 )

問4 文庫本を出版している出版社名をあげよ (例:文藝春秋社)

- ① ( 岩波書店 )
- ② ( 角川書店 )
- ③ ( 新潮社 )
- ④ ( 講談社 )
- ⑤ ( 光文社 )

問5 次の写真の名前を書け (ヒント:本誌 32 号)



① (SL58654 号機 = S L 人吉)



② ( 深水発電所 )

浦部隊(第一〇六部隊)は門司港から中国の上海に向かった。この後の武昌・漢口の戦いで良さんは戦争の地獄を見た。「食糧不足と敵の攻撃で戦友達は毎日倒れていった。この次は自分の番だ。早く弾があたればいい」と自棄と諦めの心境になった。」また続けて「月を見ながら熊本の本郷里を想い両親や兄弟・村人達のことを思い出して涙が溢れ出た」と記している。この戦いで良さんが所属する松浦部隊中隊三〇〇名の生存者はわずか一六名であった。

昭和十三年になると良さんの絵画の実力は軍の知るところとなり軍司令部で報道班の仕事をもたせられポスターや伝單(敵地に撒く戦略上のビラ)の制作に専念したこともあった。昭和十五年に二度目の帰還した際に結婚した。そして先輩の漫画家近藤日出造さんの主催する「漫画」誌に初めて政治漫画を発表する機会を得て政治漫画家への大きな一歩となった。ところが昭和十六年の夏二度目の召集令状が届けられた。この時良さんの怒りは頂点に達した。良さんは記している。「私は思わず大声で、バカタレと叫んだ。召集令状は公平に配達されるものと思国のために戦うものだと信じていたが、政府高官の子弟は徴兵逃れができたことを知った。

【むらき・まことのり／川崎市】

夏叔母山と伯父平

(オバヤマとラヂビラ)

— 人吉市 —

人吉市中神町字叔母山と鹿日町字伯父平は地域の西部山間地に位置し、あたかも伯父・叔母がムラを距てて対立しているかのようであるが、伯父平は尾治大平と書く例もある。

阿蘇郡高森町尾下には伯母様(オバサマ)、伯母城ヶ畑(オバジョウガハタ)という字名がある。城持ちの女傑が居わのだろうかと思ひながら訓仮名を見ていると、伯母城の「城」は敬語の丈(じょう)のことと気が付いた。姉ジョウ、娘ジョウなどの語は

今も生きている。伯母城と伯母様は同意である。

かと言って伯母に敬語をつけた地名の意味がわかったのではない。ナゾ解きのカギは同町尾下宇土地狭間(トチハザマ)にかくされていた。オバサマは小狭間(オハザマ)のこととわかったのである。この思考法を中神町字叔母山にあてはめると、小端山(オバヤマ)となる。葉山、羽山、早馬などと表記する地名は山の麓のことである。『日本書紀』(神代紀)に「麓は山足、これをハヤマ」と書いてある。

叔母山は字熊ノ峯(クマノミネ)にある標高372呎の熊ノ峯の南東

【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。

にあたり、まさに端山である。「小」は接頭語と考えてもよからうし、他にも端山地名があったので区別のために小端山と呼んだのが、長い年月を経て叔母山に変わったのだろう。

伯父地名は熊本県内の字名にはみられないが、『日本地名索引』には福岡県の伯父ヶ倉(オジガクラ)があり、『大和地名大辞典』には奈良県の小字として伯父ヶ谷(オジガタニ)、伯父田(オジタ)、叔父懐(オジノフトコロ)、伯父ヒ処(オジヒトコロ)、伯父屋谷(オジヤタニ)などが出ている。

これらのオジ地名と鹿日町字伯父平との間に共通事項があるか否かは

不明である。字伯父平の「平」は辺(へら、あたり)の意であるから、語幹の伯父(オチ)は落(オチ)ではないかと考える。ヲチ(伯父、尾治)とオチ(落)は仮名・音が違うが、『日

本地名索引』には三重県の落方(オチカタ)、大阪府の彼方(オチカタ)、兵庫県の遠方(オチカタ)が出ており、地名用語としてオチ・ヲチは同じに使用されていることがわかる。

落地名としては落合が多く、落水・落口などもあり、土地

区域の終着(境地)を表現する例が多い。鹿日町字伯父平は鹿目滝を含む広大な山地で、戸越町との境でもある。古人にとつて奥山は他界(彼方

遠方)であったことを思うと、伯父平は遠方平(ヲチビラ)の意だったのかもしれない。

考古学はドラマだ。



肥後と球磨  
その原史世界に  
魅せられし人々  
— 肥後と球磨の考古学史 —  
木崎康弘  
発行元 人吉中央出版社  
A5判/約600頁/上製本  
定価 3,000円(+税) 送料 200円

※九州内の紀伊国屋書店を中心に熊本市内の主要書店  
人吉球磨の書店 Anazon に取扱い中。

寛元二年(1244)の「相良家文書」には尾治大平とあるが「尾治」をヲハリ(終)と読めば、他界と通じることも考慮すべきであろう。

【うえむら・しげじ/宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】



# 県民手帳・市民手帳

年を越したので、大半の人はすでにスケジュール帳を購入・利用なきつている人もいるにちがいない。そのなかには「県民手帳」「市民手帳」を利用なきつていない人も少なくない。他的手帳と比較して安価であることもその理由になっているだろう。

じつさい、熊本県の県民手帳の場合、



佐賀の県民手帳には大版と小版の2種類がある



熊本県民手帳、八代・人吉・水俣の市民手帳。内容の比較は次号以下でおこなう

1冊450円で、手を出しやすい価格である。書店のほかコンビニでも販売されていて、入手しやすい面もある。熊本県の各種統計も掲載されていて、そこに魅力を感じる人も多い。他方、行政関係者の手帳的に感じている人も少なくない。市販の手帳と比較した場合、工夫不足であるとの批判も多

い。手帳は単純に価格の問題ではなく、使いやすいさも重要で多くの人はそれで悩みながら、くりかえし各種の手帳を眺めながら、自分に合った手帳を念入りに選んでいる。もちろん悩んだ末に、その手帳をいま活用しているかは別問題である。せっかく選んだにもかかわらず、1月半ばには、死蔵している手帳もある。日記も同じだ。僕は市販の手帳でなく、ノートですませているが、そういう方法もある。

僕は毎年、ノートを手帳として利用してきたが、昨年从今年にかけて、沖縄を除く九州各県の県民手帳すべて購入した。八代市民手帳、人吉市民手帳、水俣市民手帳も買った。馬鹿げた行動だと多くの人は思うだろう。たしかに、そういう側面を否定できないが、各種の県民手帳・市

民手帳を揃えたことには理由がある。ここ数年、県民手帳がブームになっているのだ。各県の県民手帳を比較して順位づけする作業も進んでいる。どの県民手帳も同一だろうと安易に考えて

いたが、そうではなかった。全国各県の手帳を比較するのは無理にしても九州内の県民手帳を比較してみるのも悪くない。じつさい、各県の手帳を比較してみると相当にちがう。個々の比

較は順次おこなうとして、現時点で評価すれば、熊本県の県民手帳はもっとも安価だが、内容はもっとも乏しいと断言できる。詳細は、次号以降で、少しづつ説明する。(春秋)

天保10年(1839年)5月、相良吉岐守(頼之)の在所(人吉)での隠居願を処理するため、江戸幕府は人吉に大目附大沢主馬を派遣した。八代は主馬の通過地となった。大目附の宿泊ということ、

八代松井家は各種情報を調べ、万全の対策を講じた。そのなかに、主馬が

## 藩主の隠居と大目付

ときどき寝酒を呑んでいるとの情報も含まれていた。そこで、松井は寝酒を用意した。また夜食として、白酢と湯葉の皿、魚の身、葛たたき、粉きの

翌日の朝食は、鯛の角切にかけ汁をかけた盛皿、茄子と花鰯の汁、ご飯、てろろふ、うすくす、卸生が入れれた壺、香の物、茗荷の子、丸麩、蒲鉾

を入れた平皿であった。献立は人吉相良藩の依頼に基づいた内容である。大沢主馬の一行は、八代を出立したのち、日奈久で休憩、佐敷で宿泊。漆川内で休憩、一舁内で宿泊、中神で休憩、人吉着。大沢一行の人数は59人、これに相良家の家臣25人が随行了した。

主馬は人吉に到着すると、直ちに登城し、吉岐守の隠居願を受理し、半刻足らずで、人吉を去った。このときの費用は藩財政を圧迫し、「葺山騒動」の遠因になった。(春秋)

問1 オリンピックでマラソン大会に出場したことのある日本人ランナーを10人あげよ (例: 金栗四三)

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )
- ⑥ ( )
- ⑦ ( )
- ⑧ ( )
- ⑨ ( )
- ⑩ ( )

問2 細川藩筆頭家老・松井家の当主の名を5人あげよ (例: 松井康之)

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )

問3 次の漢字の読み方を書け 例: 河童 (かっぱ)

- ① 破落戸 ( )
- ② 兄姉 ( )
- ③ 嫂 ( )
- ④ 敵役 ( )
- ⑤ 主持 ( )

問4 以下の文章は正しいか誤っているか。正しい場合は○を、誤っている場合は×をつけよ (例: 「熊本県の魚」は車エビである。○)

- ① 熊本県民手帳のほかに、熊本市民手帳、八代市民手帳、人吉市民手帳などの自治体ごとに手帳がある
- ② 鹿児島県民手帳は赤と黒の2種ある
- ③ 八代市民手帳には誤植があった
- ④ 大分県民手帳は「平成31年」の箇所を「2019年」のラベルを貼って訂正した
- ⑤ 人吉市民手帳と水俣市民手帳は同じ価格である

- ⑥ 熊本県民手帳は、全国都道府県手帳のベスト5に選ばれている
- ⑦ 佐賀県民手帳は、大型版と小型版の2種類がある
- ⑧ 人吉市民手帳はコンビニで購入できる
- ⑨ 水俣市民手帳は水俣市民以外は購入できない
- ⑩ 熊本県民手帳は、「熊本県の歌」として「おてもやん」を紹介している
- ⑪ 県民手帳は熊日新聞社が発行している

問5 次の写真の名前を書け (ヒント: 本誌33号)



- ① ( )
- ② ( )

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは77頁で。

くまがわ春秋歌壇

いも短歌会

「災」は天から降るとは限らないアベに発して全土を襲う  
恭順の意を米口には示しつつ聞く耳持たず韓国責める

柳原 三男

夕焼けて球磨の盆地のパノラマに早くも昇る東に月が  
朝寒し夫入れくれし熱き茶に手の平温め飲みごろを待つ

坂本 ケイ

孫娘の成人式の前撮りに和服で臨みしやきつとなりぬ  
ウオーキングに出て行く夫の背を見つむ共に歩く日きつと迎えん

上田 廸子

今年の今この時は在りし母同胞集いて一周忌終ゆ  
手のひらにおさまるほどの頭持ち小さきこぶしの孫の湯浴みよ

宮川しのぶ

数の力使って次々強行の安倍政権に明日は託せじ  
卒寿越えし友声高に言い放つ「こぎやん政権見たことなか」

上田 精一

# 安倍首相の年末年始

久馬 俊

昨年の大晦日、ご先祖さまのお墓の「掃除」、正月の準備で忙しかった。そうしたことは大晦日の前までには済ませ、ゆったりした気分でも新年を迎えるべきであるとの意見もあることは重々承知しているけれども、僕のように、切羽つまらなければ準備を終えない人もいるにちがいない。新年がくることは知っていても、日々の仕事は忙しくて、その準備をすべて計画通りに済ませるのはそれほど簡単ではない。少なくとも、僕はそういうのは苦手だ。毎年、大晦日はもともと忙しい。紅白歌合戦が始まるまでに作業がすめばいいほうである。

首相の安倍さんはどうすごしたのだろうか。首相という職業は多忙を極める。きつとそうだろう。忘年会もできないほどに忙しさに決まっている。だから、僕と同じように安倍首相も新年の準備に追われていたにちがいない。首相という職業は便利な面もあって、日記をつけなくとも新聞社が毎日記事にしてくれる。「首相の動静」という記事だ。別のぞき見することが好きなわけではないが、い

るいところで、映画どころではないはず。秘書が5人もいるので、映画を観る余裕があるのかもしれないが、そのあたりのことは庶民には推測がつかない。

いずれにせよ、昭恵さんは家事をしていない。夜は、ホテル内のステーキハウス「オークドア」で、ご主人の安倍さんと夕食を食べている。18時27分から食べ始めたようだから、紅白はみていないようだ。「年越そば」を安倍夫妻がいただいたかは不明である。その席には、荒井広幸内閣官房参与夫妻も同席している。大晦日の夜に紅白も観ないで、首相と夕食である。荒井さん夫妻は安倍さん夫妻とはきつと仲がいいにちがいない。良すぎるほどに仲がいいのだろうか。旦那同士はそうにちがいないが、奥さんたちはどうだろうか。荒井さんの奥さんは、「大晦日なのに、えらい迷惑だわ」と思ったかもしれない。荒井広幸さんは元国会議員で、渾名は「政界の一寸法師」。身長が155センチと小柄であるために、その渾名がついたらしいが、あまりにもひどい渾名すぎる。

翌日元旦。安倍首相は、皇居での新年祝賀の儀への出席を除くと、昨年と同様、家族団らんの正月をすごしている。記事を読みかぎり初詣にはいっていない。朝食の記事もない。前日、ステーキだったので、一食抜



ちおう、大晦日の安倍さんの行動を新聞で確認した。多忙を極めているにちがいないとの僕の推測は完全に外れた。安倍さんは、午前10時には、東京・六本木のホテル「グランドハイアット東京」の「MAGOMIスパンドフィットネス」で運動したらしい。これには驚いた。大晦日にもかかわらず、余裕がありすぎるようにみえてならない。それは別にして、安倍首相が「グランドハイアット東京」という横文字混じりのホテルが好きなのがよく分かった。安倍さんは、去年も、このホテルで年末年始を過ごしているからだ。大晦日と新年をホテルでむかえたことのないので、なにもいえないのだが、僕なら、同じホテルでなく、別のホテルを利用するだろう。色々なホテルを味わいたいからである。しかし、安倍さんは連続して同じホテルを利用した。よほど好きなだろう。

午前中にフィットネスで汗を流したあと、午後には、東京・六本木の映画館「TOHOシネマズ 六本木ヒルズ」で昭恵夫人母親の洋子さんと映画「こんな夜更けにバナナかよ」を観ている。マークしていた映画だ。地元の映画館で僕もみたくと考えてはいた。「オリエント急行殺人事件」にひきつづき、安倍首相に先を越されてしまい、なんとなく、くやしい気分になる。母親の洋子さんは、たぶん、高齢だろうから、映画鑑賞も悪くないと思うが、昭恵夫人は余裕ありすぎでないか。大晦日は中年女性の腕の振

いたであろうか。昨年と同じく、お雑煮、酢だこ、干し柿を食べた気配はない。昨年は、ホテル内の日本料理店にいらしている。これは昨年と同じである。元旦にフランス料理店で食事している。これも昨年と同じである。元旦にフランス料理ではないであろうと思うけど、安倍一族は元旦にはフランス料理と決まっているようだ。初詣にもいかず、雑煮も食べない。「美しい日本」を標榜しているのだから、形だけでも、和食重視の正月をすごしているように振舞ってほしい。

元旦にも、昭恵夫人らと映画を観ている。場所は大晦日と同じく、「TOHOシネマズ六本木ヒルズ」で、映画は「ボヘミアン・ラプソディ」。ノーマークの映画だ。だから、あまり悔しくはなかった。昨年と同じく、安倍首相は家族と記念撮影している。元旦の記念写真は、安倍一族の習慣のようだ。

もともと気になるのは元旦に1年の計として、なにを計ったかである。消費税などの政治の話ではない。個人としての安倍さんの計である。これについてマスコミはなにも伝えていない。おそらく、公表できない計なのだろう。それはそれでいい。政治的には憲法改訂を所信としなかった。歓迎したい。東京オリンピックの騒乱のなかで憲法改訂を政治課題としてかかげるとすれば姑息である。

【きゅうま・すぐる／八代市】

我們提倡使用「一個切」和「兩項對照組合」的二行俳句書寫

世界に二行書きによる「切れ」と「取り合わせ」を取り入れた Haiku を提案する

趙紹球

● 時間凝成一圈圈漣漪  
枯山水

〔永田満徳評論〕  
將時間的流動以「漣漪」來形容著實引人入勝。此句估計是形容觀賞「枯山水」後的感動，如「漣漪」般迴盪不已。

趙紹球

● 時間はさざ波になる  
枯山水

〔永田満徳選評〕  
時間の流れを「さざ波」と表現しているところに惹かれる。「枯山水」に対する感動が「さざ波」のように襲ってくる様を詠んでいるのであろう。

郭至卿

● 拄著柺杖的老人  
聽到北風

〔永田満徳評論〕  
乍看之下，「老人」與「北風」似乎沒有直接的關聯。雖然如此，我們仍然能感受到老人拄著柺杖，彷彿是在對抗寒冷的北風而凜然站立的態度。

郭至卿

● 杖で立つ老人  
北風吹く

〔永田満徳選評〕  
「老人」と「北風」とは直接的には無関係かもしれない。しかし、寒い北風に抗うように、杖一本を突いている老人の凛とした態度が感じ取れる。

離畢華

● 清淚兩行  
松脂

〔永田満徳評論〕  
此句將「松脂」擬人為「淚」著實好。「清淚」更是一種正向的態度，令人想像，或許是像慶祝華文俳句的創立這樣的情景而流下的喜淚。

離畢華

● 二行の清き涙  
松の脂

〔永田満徳選評〕  
「松の脂」を「涙」と擬人化しているところがいい。「涙」を「清き」とすることによって、例えば二行の華文俳句の出発を寿ぎ喜ぶ「涙」であろう。

【ながた・みつり／俳人協会会員、熊本市】

情報。ピックアップ

「人吉の偉人に学ぶ会」

1月26日にシンポジウム

昨年5月に発足した「人吉の偉人に学ぶ会」（松本晋一会長）は、第一回目のシンポジウムと交流会を今月26日に開催する。

同会は人吉・球磨が生んだ近代日本の先覚者たちを「人物遺産」として捉え、これらを教育資源・観光資源として、次世代の子どもたちや地域の人々に発信し、活用してもらうことを目的として発足。川上哲治記念コーナー・高木惣吉記念館・犬童球溪記念館などと連携し、郷土の各種の遺産の中でも特に人物遺産に興味のある人の

入会、主体的な地域遺産の活用と運営に期待している。

シンポジウムは26日午後2時より、人吉市九日町の肥後銀行人吉支店3階で、元済々黌校長の川上修治さんが「わが伯父 川上哲治を語る」と題して基調講演、「知つとんね、こぎゃん人、あぎゃん人」をテーマに語り合う。交流会は「桃李温泉石庭」で午後6時より、会費5000円にて開催される。お問い合わせ・申し込みは同会事務局（☎090・3415・2517）まで。

すべての人を自分の親だと思って…



- 特別 善 護 老 人 ホ ー ム
- 短 期 入 所 生 活 介 護
- 通 所 介 護 事 業 所
- 居 宅 介 護 支 援 事 業 所

社会福祉法人 天雲会

〒868-0086 人吉市下原田町瓜生田1057-9  
施設部門 ☎0966-22-6621 FAX 0966-22-6622  
在宅部門 ☎0966-22-2141 FAX 0966-22-2183  
URL: www.ryuseien.jp  
E-mail: tenunkai-daihyou@ryuseien.jp



## 編集後記

細川藩の御用絵師「矢野派」についての大倉隆二氏の論考（3頁）によれば、藩のバックアップがあったからこそ矢野派独自の画風を確立できたらしい。江戸時代の熊本には浮世絵などの流派は興らず、武士だけでなく町民までもが矢野派の絵を鑑賞していたという。★小山勝清については本誌で何度も取り上げているが、今回紹介した「民俗主義文学論・緒論」は勝清が亡くなる前年に書かれた遺作である（47頁）。従来の歴史書には庶民がいかに生活したかについての記録がなく、この空白を埋める研究分野が民俗学である。次号に掲載する前山光則氏の論考で勝清の著作の意義を探りたい。★年末に飛び込んで来たニュースであるが、製紙メーカーが印刷用紙の大幅な値上げをするという。原材料の高騰や輸送コストの上昇により、一月出荷分から20%も上げるといふ。このことは、紙媒体を扱う関係者にとっては大きな痛手となるだろう。本誌も影響を受けることは必至で、昨年秋季に値上げされた送料とのダブルの痛手。購読料の値上げも検討しなければならぬのかとも思う、なんとも頭の痛い新年の始まりである。（ま）

〒868-0015  
 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号  
 人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部  
 info@hiyoshi.co.jp  
 電話・ファックス 0966・23・3759

## インフォメーション

- 1月17日(木)
  - ▽奥球磨いごんがりフェア・オープニングセレモニー(水上村保健センター)
- 1月19日(土)
  - ▽人吉市図書館「図書館まつり」(人吉市カルチャーパレス)
- 1月20日(日)
  - ▽第7回公認奥球磨ロードレース大会(水上村役場前発着)
  - ▽第63回錦町新春駅伝大会
- 1月22日(火)
  - ▽ひとよし森のホール20周年記念「宮川彬良ニューイヤークンサート(同ホール)」
- 1月26日(土)
  - ▽人吉市「第65回文化財防火デー防火訓練」(願成寺)
  - ▽「人吉の偉人に学ぶ会」発足記念シンポジウム(肥後銀行人吉支店3階) および記念交流会(桃李温泉石亭)
  - ▽第49回球磨郡町村対抗青年団駅伝大会(あさぎり町東庁舎周辺周回コース)
- 1月29日(火)
  - ▽八代市立博物館・図書館共催・特別講座「八代の禅寺とその歴史と寺宝」(八代市立図書館大集会室)
- 2月5日(火)
  - ▽八代市立博物館・図書館共催・特別講座「神幸行列を考へる〜いつ、どのように始まったのか?」(八代市立図書館大集会室)



TAKEDA Eye Clinic

# たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司

人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの

## アイウェア 榎

(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

デイサービスセンター

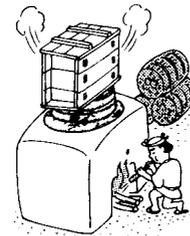
ケアプラン作成所いずみ  
(居宅介護支援事業所)

# いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック

人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の技



御膳醤油

(だし入り万能しょうゆ)



◆玉子かけご飯  
◆豆腐  
◆お刺身に

300ml 650円(税抜)



◆みそ煎餅  
477円(税抜)



◆納豆みそ  
477円(税抜)

◆納豆みそ  
(お徳用)  
300円(税抜)



九州粗食 蔵めくら  
人吉散策コース  
みそ・しょうゆ蔵



釜田醸造所  
 会長 釜田元嘉頭  
 社長 釜田嘉頭

〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16  
 電話 (0966) 22-3164  
 FAX (0966) 22-3165  
 メール info@marukama.co.jp